

な～げる

NO. 8



Alpine Climbing Club Of Japan

卷頭言

水島幸男

早いもので、もう十四年過ぎてしまった。この間に、様々な事が有ったが、ここまで来られたのは、ひとえに良い仲間に恵まれたからである。そもそもが誰に頼まれた訳でも無く、無償の行為である登山だからと言っても、自己を犠牲にして、会の為に尽してくれた仲間達に、深い感謝の意を表する。

入会して来た動機は様々であっても、共通する事は山が好きだと云う事で入会し、今日に至っている事だと思う。それぞれ長所・短所を待つた者が、会の中で、山の中で、互いを尊重し合い、協力し助け合つてこそ A C C I J の会員としての意義がある。

ひとつコップエールの飯を分け合い、一本の水筒の水を飲み合い、共に困難に立ち向える。この様な素晴らしい仲間が、諸君の日常生活の囲りに、どの位居るだろうか？。山と云うものは、知れば知るほど大きく深いものだ。功利的な考へを待つた者では、とても立ち向えるものでは無い。この先、何年でもこの仲間と力を合せ、進んで行きたいものである。

目

次

卷頭言

A C C I J のあゆみ

笛吹川東沢水壁トレーニング

八ヶ岳権現沢ナメ滝ルンゼ

冬の小同心クラック

八ヶ岳大同心正面壁雲稜会ルート

谷川岳幽ノ沢左方ルンゼ冬期登攀

宝剣岳中央ルンゼ

谷川岳茂倉岳縦走

谷川岳幽ノ沢左方ルンゼ

谷川岳幽ノ沢中央ルンゼ

谷川岳幽ノ沢右俣リンネ

谷川岳幽ノ沢直登ルート

山への誘い

A C C I J 救助訓練

忘れられない花

ブラッツ・ヨーズ(六、一九一m)試登報告

A C C I J ・ヒンズ・ラジ登山隊

谷川岳一ノ倉沢中央奥壁直上ルート

谷川岳一ノ倉沢変形チムニー

谷川岳一ノ倉沢コップ状右岩壁左カントルート

穂高岳滝谷合宿

夢の岩壁……滝谷

前穂高岳北尾根四峰松高ルート

前穂高東壁右岩稜Dフェース

甲斐駒ヶ岳・赤石沢奥壁Aフランケ

明星山南壁A C C I J ルート

谷川岳幽ノ沢中央壁左フェース

谷川岳・一ノ倉沢二ルンゼBルンゼ

谷川岳・幕岩Cフェース正面壁

谷川岳・一ノ倉沢南稜

谷川岳・一ノ倉沢滝沢第一スラブ(下部ダイレクトルートードーム壁)

黒部丸山東壁緑ルート

北岳バットレス・ピラミッドDガリーオ壁

第一尾根ノーマルルート

編集後記

富 鈴 木 藤 大 吉 本 金 神 本 名 中 藤 金 水 松 中 高 鈴 金 金
所 木 村 原 坪 井 図 田 図 雪 島 原 沢 島 原 島 橋 木
正 庄 雅 マ 清 一 雅 和 一 博 雅 幸 文 荘 雅 雅
利 平 一 一 リ 二 統 男 臣 統 二 淳 一 清 男 夫 淳 敦 平 男 男

本 富 阿 本 吉 吉 山 村 本 鈴 中 金 村 金 高 富 佐 藤 神 水
図 所 部 図 田 田 上 田 図 木 島 沢 田 橋 所 藤 原 田 島
一 正 一 智 信 若 一 庄 雅 正 正 雅 和 幸
統 利 博 統 枝 一 子 勉 統 平 淳 清 勉 男 敦 利 章 一 臣 雄

A
C
C
I
J
の
足
跡

神田和臣



ACCIJが、昭和三十七年末に創立されてから、早くも十五年を迎えることになりました。振り返るに、五年の歳月が経つのは早いものです。当時東京仙岳会（関西のクラマーであつた、古武家善七氏によつて創立された）に、属していく私達は、会の雰囲気が停滞気味であるし、山行面においても、若さを發揮する事が出来なかつた上に、前衛的なものがなかつたので、沈滯氣味であつた。

ある者は個人山行で満足し、会の山行には消極的であつた。これではいけないと言うので、谷川氏が中心となり、何んとか打破しなければならないと、有志が集まり話し合うも、現在の会に居たのでは、マンネリ化するばかりなので、この際会を離れるのは、忍びないが、やる

氣のある者のみでやつて行こうと言う決意で、退会することにした。

谷川、水島、神田の三人が中心となり、十四名で、新しい会を創立する。その後、東京仙岳会は自然消滅する。新しい会の名称を何んと付けるかでもめたが、英國は山岳界においても古く、オーソドックスな登山をしようではないかと言うグループが有り、我々もオーソドックスな中には、前衛的なものを志す者であるので、歴史の重みの中から抜け出せるよう、「アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン」と名称を決めた。

行を目標とする。この目標が、後年になつても変らず、夏山より冬山の方が回数が多いと言う者が現われる仕事である。

最初の冬山合宿が、谷川連峰仙ノ倉岳北尾根であつた。

まだ仙ノ倉北面で、合宿をやる会が少なかつたので、雪になじみ有意義な合宿であつた。いろいろな失敗があつたが、その経験が生きるようになつた。「経験とは、何なんとなく登山を成功させることも経験であるが、小さな失敗を繰り返しながら、登山することも大きな経験である。そのことを自分の身に付けることが真の経験であると思う。」

合宿後も、仙ノ倉北面に良く行き、かなりの足跡を残すことことができた。

現在の冬山登山、及び冬山合宿においても登ること、

岩壁登攀のみを志し雪になれることが忘れられているような気がする。現代の忙しい時代の反映であろうと思われるが、冬山の美しさ、雪の恐わさ及び友情を習得するのも、合宿の一部ではないかと思う。山行面において、特に現在の会の基礎になつているものは、八ヶ岳赤岳及び横岳西面の夜行日帰り山行である。当時では、一泊二日が常識であつた。冬の夜行日帰り山行で西面の岩壁及

びルンゼの各ルートをスレースしているうちに、あたりまえの山行になつてしまつた。これが後には夏の北岳バットレス、甲斐駒赤石沢奥壁への夜行日帰り山行へと発展していった。

A C C I J では、日曜日以外は休みの取れる者がないかつたので、この常識を打破しようと決意し、敢然とこれにうち向つた。一、二、三月と毎週八ヶ岳に通り、中でも横岳西面大同心ルンゼの大氷瀑に心をうたれ六週も通いつめ、ようやく完登することが出来た。

このような山行を重ねるうちに雪だけではなく、氷のテクニックをも習得してしまつた。これが後に氷のルートの登攀に大いに役に立つた。夏においては谷川岳、穂高のバリエイションルートにトレーニングを重ねる。

昭和三十九年一月、南アルプス甲斐駒ヶ岳黄蓮谷右俣の滝を完全直登。四十年一月、甲斐駒赤石沢奥壁右俣ゼ完登と充実した山行が続く。四十一年より後立山の鹿島槍に数次の合宿をする。その中で神田が、四十一年六月よりヨーロッパアルプスに出かけマッターホルン北壁ブチドリュ南西岩稜の登攀に成功する。これを契機に毎年のようにヨーロッパアルプスに行くようになつた。ヨ

岩壁に囲まれた山があるので、意欲を燃やして取組んだが土石流というアクシデントにベースキャンプを流されやむなく敗退することになった。この失敗を今後の遠征の為にも大いに参考としてやついただきたい。

「若き一時代を、一つのものにむちやくちやに情熱を傾けることが出来ると言うことは、若人の特権である。

この特権と言ふ資格を自分で放棄することはあるまい」。

当会も創立から、数々のアクシデントが有つたが幸いにも死者を現在迄出すことなく過せたと言うことは幸せであると思う。これからもアクシデントを皆無にすべく努力すべきであろう。

冬期においても中野がグランド・ジョラス北壁中央クロワール及び、ドロワット北壁クジールートの初登攀に成功する。国内においても負けられぬと大きな山行、登攀にいそしんだ。そうしている中にも何かマンネリ化してきたので、何か打開策としてないものかと考えているうちに、明星山P六南壁に、ルートを開拓しようではなかなかつてみようと決まる。何回もの試登を繰り返したのちついに昭和四十五年九月に富樫・吉田・金沢・阿部の四名が完登することができた。このルートは南壁のど真中を真直ぐに登る豪快なルートである。パーティの一人はまだ一年目の会員でやる気のあるものならば出来るといふ証拠である。

海外でもヒマラヤに目が向けられ、五十一年にヒンズーラジのブラッツ・ヨース（六、一九一m）に本図・阿部・木村・金・杉山の五名の遠征隊を出した。圧倒的な



笛吹川東沢氷壁

トレーニング

一九七七年一月 藤原雅一

新チーフリーダー金沢さんの基での初めての会山行である。新宿を一月二十九日の夜出発し笛吹川二俣へ車で向う。そこで仮眠をするが、金さんと僕だけは車の中に入れず外で寒いピバークをするはめになってしまった。朝出発、西沢を左に見送り東沢に入る。入口に「初心者立入禁止」の看板があつた。本図さんがこの看板に目をつけ「僕は初心者でないからいいや」と言いながらハリガネを潜つて行つた。初めは乙女沢まで行く予定らしかつたが、例の調子で乙女沢よりはるかに近い左岸から入つてくる沢と決まる。出合のF1は登山道よりも下にあるのでF2から登る。そこでしばらく練習した後、上流へ向う。いくつか小滝を越すが暖かいためか、だいぶ水が解けていて水が流れている。二俣に着き一休みした

吉井さん達が登つたがかなりたつていてのこと。下降は右岸のブッシュの中を懸垂下降する。沢の出合いまでは同ルートを下降するが、氷の下降というものは少しの傾斜でもあんがい恐しいものである。以前同じ東沢の支流乙女沢を下降した時、F1の上部の緩傾斜の氷壁を夜とうることもあつたが懸垂で降りた経験があつた。何回か两岸のブッシュを巻きながら降りていてうちに登山道に着いた。金さん達は早く降りて氷壁のF1を登つていたみたいだ。みんなそろつた所で笛吹川二俣に帰り、その日のうちに帰京する。



八ヶ岳権現沢

ナメ滝ルンゼ

一九七七年一月の記録 佐藤正章

昨日、清里駅からタクシーに乗り継いで、美しの森に着いた時は、まだ小雪が降っていた。凍ついた林道を歩くうちに、空も晴れ上り権現岳が眼前に屹立していた。

二月十日早朝四時、きのう見た権現岳の雄姿に心踊らせながら、地獄谷の出合小屋の中で目覚める。満天の星空の下よく冷え込み、今日の晴天が約束されている。

曙光の頃、小屋を出発権現沢へ向う。途中、天狗尾根、地獄谷本谷、上の権現沢と過ぎ、昨日我らの小屋到着と入れ替りに出ていった四人パーティのピバーク跡に達する。権現沢左俣と分れ、右俣に入る。左手正面ルンゼの出合付近の尾根に取りついているパーティを見かける。この付近から、登りの傾斜も増し、氷瀑も現われ始める。積雪も多いため、容易に幾つかの氷瀑を越すうちに、先

行パーティの姿をとらえる。昨日の四人と思われ、ラッセルに苦労しているらしく次第に距離がちぢまつてくる。途中、彼らが休憩中に追い抜き、先頭に出る。雪質の軟いところでは、ラッセルに苦労するためだけ固い所を求めて急登する。特に困難な滝もなく、ようやく三ツ滝ルンゼとナメ滝ルンゼの出合に達する。この頃には陽も高くなり、ボカボカと陽気な位であり、周囲の木の枝に乗つた雪塊が温められ、時々ドサッと落ちてくる。ここから三ツ滝ルンゼへ入る。沢の中も狭まり、更に傾斜を増し、時々周期的に小さな雪崩がおしよせてくるが、特に危険とも感せず、そのまま進む。沢の中央付近は雪崩で磨かれ、キックステップが効果的である。急に周りが拡げ、正面に三本の氷瀑が現われる。左側二本は細く、正面寄りの右の滝が本流と思われるが、直登不能、しかもその右の壁は、バンドが左上し落ち口へ延びていて、だんだん不安に駆られる。結局、三ツ滝ルンゼを降参! ナメ滝ルンゼに方針変更し、一気に駆け下る。

先の合流点の手前で支尾根を越えてナメ滝へ入る。再び、先程のパーティのトレースをたどり、どんどん高度

をかせぐ。先行パーティに追いつく頃には、ルンゼもかなり両手を広げれば、左右の壁に両手が届きそう。この時、またもや雪崩が襲つてき、あやうく流れの脇に飛びのき難を逃れたが全員一列に並んでおり、うつかり足元をすくわれれば、どうなつたことかと思い、ほつとする。

二段の氷瀑の下で、再び先頭を代わり、ここから佐藤がトップに出る。積雪が多い為氷瀑も苦なく越えるが、この先から傾斜は最もきつくなり、ピックルを一步一歩差し込みピックルにすがつての登攀となる。更に小さな氷瀑を過ぎた所で、トップを木村に代る。

周囲に目を向けると、両側の尾根の高さも近づき、明るく広げてきた。カンバの木も粗らに、正面には青空とはつきり区切られた白い稜線が真近かに見え、登攀終了も間近かと期待する。僕の下には、藤原・金沢・阿部と一列に続いている。ちょうど昼頃である。

雪に隠れたヤブに手こずりながら登る木村を見ていると、稜線近くで何か白いものが動いた。何かなど考える暇もなく、ブロック雪崩が襲つてきた。声をかける余裕もないうちに、突然頭と胸に強い衝撃を受けた。落ちていいくのが、無意識の中に感じられる。口、耳に雪が圧し

出す。

陽が沈む頃、林道に出、美しの森に帰ったのは夜八時であつた。結局、佐藤は両足ひざの打撲で二ヶ月の通院となる。木村も足首骨折で春まで活動停止。金沢はザック破損、身体は特になし。阿部は、腰の打撲のみ。藤原が最も被害軽微。

バカ陽気に心を油断したこと、及び先行パーティの行動に引きづられて、冷静な状況判断を誤つたことが、今回の反省点と思う。

(バー・ティイ 金沢清・阿部博一・木村一・佐藤正章・藤原雅一)

冬の小同心クラツク

一九七七年二月二〇日 富所正利

まだ夜の明けきらない中、車のドアを開け外へ出る。頬をさす冷たい空気、出発の準備を始める。自分達が出発する頃、急行、タクシーで乗り継いできたクライマー

てくる。体が雪崩の勢いに奔ばれ、急に浮いた感じがしたと思つた刹那強い落下のショックが加わり再び雪にされる。こんな状態が何度も繰返されるうちに、もうだめかとあきらめた気持が本能的に生きようという考えが生じ、身体を自ら回転させ、流れの本流から逃れようとする。

最後に大きく体が軽くなり、強い落下の衝撃があつた後、流れが止つた。

受けたダメージに、喘ぎながら放心状態で雪中にうずくまつている。ようやく、誰かの呼びかける声に、うめきながら周りを見回すと、メガネを失いポンヤリと仲間の姿を確認する。ナメ滝と三ツ滝の出合から更に下の氷瀑の扇状に止つたらしく。距離にして数百mは流された。各自の無事を確認し合うが、金沢が一時に記憶喪失になつてゐる。佐藤が最も強く打撲を受けてゐるが、我々の下方にいたバー・ティイも、一緒に流され、内一人は上半身不随状態である。声をかけると自力で下降することとで、我々は装備をひろい集めた上で、体中の痛みに耐えつつ下降する。氷瀑の下降では、ザイルにつかまりながらの下降となる。ようやく出合小屋に到着するが、翌日の痛みの増加を考え、今日中に下山することで再び動き

が到着する。バー・トナーは、吉井さん、ルートは、小同心クラツク。大同心へ行く金、高橋バー・ティイも一緒である。単調な道を赤岳鉱泉へ。いつの間にか夜も明け、鉱泉の付近であおぎ見る小同心は、雪もそれほどついていない様に思う。鉱泉の前でひと休みし、出発する。

大同心稜へは、すでにトレースがある。大同心の取り付きで、金・高橋バー・ティイと別れる。大同心ルンゼをトップで取り付く。軽快に登つてゆく。数分後、ザイルが二回ぐらいいぐいと引張られる。登つてこいの合図だ。傾斜は、けつこうあるが、ホールド・スタンスが豊富でしつかりしているので、どんどん登れる。二ピッチで終了。ザイルを巻き、横岳の稜線へトラバース。ここからまた悪い。雪が不安定で、風雪がいろんな方向からくる。顔に当つて目を開けていた程だ。トラバースするのに三十分程かかり稜線である。しかし、風は一向に弱まらず吹き荒れている。横岳を過ぎる頃、突風が何回かあり、そのたび体が浮いて飛ばされそうになる。ついでに、アイゼンのビスが一本はずれて、バカバカしている。細いシユーリングでその場は何んとかなつた。地蔵尾根を

- 11 -

下りだし風がなくなりやつとおちつく。初めての冬期登攀でいろいろ勉強になることが多かった。夏には問題のないアプローチや終了後のルートが、冬では、そのまま登攀の一部となってしまう。さらに精神力や体力が、そのまま登るということに關して影響してくる。初めての体験でいろいろなことがあつたが、同時に、とても楽しい山行だった。

(バー・ティ 吉井清二・富所正利)

八ヶ岳大同心

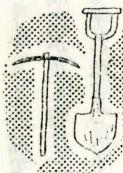
正面壁雲稜会ルート

一九七七年二月二〇日 高橋 敦

小屋で朝食をすませ、吉井・富所バー・ティは、小同心へ。私達は大同心へ向う。大同心沢から大同心稜に出て取り付きに着くと、すでに四名、壁に取り付いていた。大同心沢には、二匹の熊がうろついていた。さつそく金がトコブで壁に取り付く。1P目5mのフェースをハン

グに向つて登る。フェースは細かく緊張させられるが、金はグングンザイルを延ばし、ハシクの向うに消えて行く。2P目、20mの人工をなんなく起す。3P目、ルートは右に廻り込み、ガリ一状に入るが、廻り込む所が非常に悪く、何回も躊躇した結果、どうにかだましたまゝ乗越すことができた。4P目、草付きまじりの壁をドーム壁に向つて登り、右に廻り込みドームの基部に着く。5P目、南稜の肩に出ると、急に風が強くなり、時間も遅くなりそうなので、このまま大同心沢に降りようとの話があつたが、二人の強い意志の元に、ドームを登ることにする。ハーケン・ボルトの間隔は狭いが、あまりにも強い風のため、ハーケンに掛けたアブミが、宙を舞い、以外と苦労させられたが、三時に登攀を終了する。

(バー・ティ 金雅男・高橋敦)



谷川岳幽ノ沢左方ルンゼ

冬期登攀

一九七七年三月の記録 金 雅 男

我々、金・吉井・村田は二月の下旬に左方ルンゼを試みようとしたが、雪崩やヒドンクレバスに悩まされ取付の20メートル手前で敗退せざるをえなかつた。三月十三日、再度試みる。ところが村田氏の都合が悪くなり、替りに杉山氏が入り、吉井・杉山・私の三名で行く事にする。いつもの十時十三分の夜行で上野をたつ。土合着、今日は星がでている快晴。外は非常に冷え込んでいる。そのまますぐ駅を出発、昨日は降雪がなかつたらしい。今日はラッセルしなくてすみそうだ。トレースがあるので時間的には早く一ノ倉の出合に着いた。五分間位休憩し幽ノ沢の出合めざして歩く。幽ノ沢出合着七時。先行バー・ティは見あたらない。ここで少し腹どらえをする。雪崩を警戒し沢づたいに行かず展望台めざして登る。急登な上、足がまだ慣れていないので疲れる。

デブリがものすごい。その上を歩いて沢に入る。以前に来た時に雪崩にあい危機一髪で逃げているので雪崩には充分気を使いながら沢の左側を登る。表面がクラストしているので快適に高度をかせぐ。Tの約2P下あたりで登攀具をつけ、ピッケルとアイスハンマーのコンビネーションで、左方ルンゼ基部から中央壁側に四十メートルトラバースした地点まで登り雪壁を削りテラスをつくる。先行バー・ティが左方ルンゼに取りついている。中央壁にもV字状岩壁にも誰一人としていない。チリ雪崩が頻繁に落ちてくる。左方ルンゼはすばらしいブルーアイスと化していた。先行バー・ティは非常に手こずっているらしい。ザックには神奈川RCCと書いてある。三・四〇分待つただろうか、先行バー・ティは依然として1P目で苦労している様子で、これでは何時になつたら登れるかわからないのでルート変更をしようと話し合い、左方カンテを登る事にする。私が10メートル位ベルグラの張つた壁を登つたが、その上はどうしても氷が岩から剥脱しない。しょうがないので一応降りる事にする。その時、先行バー・ティの彼等も降りてきた。話を聞いたら氷の状態が良くないので登れそうにもないということだ。我々

パー・ティはますますファイトをかきたてられ、一P目の垂直に近いような壁を、私がトップでダブルアックスの技術をいかし三〇メートル登り、そこにチャンネルを一本打ち、後は先行パー・ティが残置していく平型を二本拝借しアブミビレー。中間ビレーをとつてきたが緊張するピッヂだつた。杉山をあげる。吉井は時間を考慮してユマールである事にする。二P目杉山がトップで登る。続いて吉井、私がある。（三〇メートル）。三P目、私がトップで四〇メートル登る。この三Pが冬期の左方ルンゼの核心部だろう。四P目、杉山がトップで登り雪の上から顔を出している岩にロックハーケンを二本打ち込みビレー。金、吉井が登る。

ここで傾斜が少し落ちたので、パンとチーズを食べ腹ごしらえ。これから上部は、細いルンゼ状となる。チリ雪崩がポンポン落ちてくる。五P目、続いて私がトップで四〇メートル思いつきザイルをのばす。表面がザラザラ雪なのでスリップして落ちそうになるのを、ハンマーをたたき込み、からうじてこらえる。下で確保している彼等は、多量のザラメ雪が落ちるものだから声をかけてくる。平型とチャンネルを打ち二人を上げる。これらはそんなに傾斜もない、計算からすると、あと三P位

でこのルンゼを抜けられるはずだ。杉山がファイトをむきだしにして、これから俺がトップをやるという。彼の言うなりにまかせる。実に頼もしい奴だ!! 六P目、杉山が四〇メートル登つたところでコールがかかる。吉井、金一緒に登る。上部がだいぶ開けてきたようだ。時間は四時頃、薄暗くなつてきた。七P目、杉山が快適に登つていく、上でたゞといコールが聞こえてきた。私達も登つていく。やつと視界が開けた。でも中央壁の頭はまだ遠い。まだ気は抜けない。今度は私がトップで高度をかせぐ。途中、亀裂が生じているところが三ヶ所位あり慎重に乗越す。ピッケルで確保。吉井、杉山が上つてくる。そのまま、吉井、杉山登る。着いたぞといコール、中央壁の頭にてたらしい。私は急いでかけあがる。登攀終了。長い登攀だった。時計をみると六時をさしていた。『ヤッタゾ』。固い握手、皆の顔はほほえんでいるにすぎないが、心の中では充実感でいっぱいであろう。行動中は寒さはそんなに感じられなかつたが、立ち止まつていると、寒さが身にしみる。行動食を口の中にほうり込み、登攀具をはずし、ゼルブーストバンドだけつけて堅炭尾根めがけてまつしぐら。だいぶ暗くなつていたが雪の白さが明かりになり、堅炭尾根まであがる。ヘッド

ランプをだし、下降路をみいだそとブッシュの中へ入る。やつとの思いで沢に下降できそうな所をみつけ、そこから一直線に沢をめがけて下降。さすがに下りは早い。芝倉沢出合着。八時。キーのトレースをたどりながら新道まで下り、土合の駆めざしてまつしぐら。土合駆着十時、上野駆着五時頃の列車に乗り込む。山行を振りかえる。ほど良い睡魔が襲つてきた。 （パー・ティ 金 雅男・吉井清一・杉山善男）

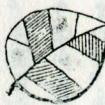
宝剣岳中央ルンゼ

一九七七年三月 村田 勉

雪洞を出ると今日も快晴のようである。いつもの事な

がら朝には、登るぞと言う鬭争心と、出発しなければいけないのかと言う弱気が交錯する。昨日登つた杉山・高橋バー・ティが苦闘しているのをじかに下から見ていただけに、今日の出発用意には余計気が重くなる。それでも

（パー・ティ 村田 勉・富所正利）
宝剣の頂上へは左の岩を回り込み右上する。取付八時、終了九時三〇分。



谷川岳・茂倉岳縦走

一九七七年四月三日 金沢 清

二月の八ヶ岳権現沢ナメ滝ルンゼで雪崩に流されて、ピッケル、アイスハンマーを失つてしまつて、冬の間は山に行けなかつたので、今回は久しぶりの雪山である。

土合に着いて昨日から来ている宇井さんと金ちゃんを見つけてから朝食を取り、土合を出発する頃にはすっかり夜は明けていた。西黒尾根登山口の指導標から送電線の鉄塔へ着くまでにもう汗をかいてしまつた。やはりトレーニング不足のせいであろう。雪は腐つており、もう春山である。樹林帯で休みをとり皆でバカ話をしてから出発である。樹林帯をつめると東尾根や朝日岳が眺められ非常に気分壮快である。登攀も良いが春山の尾根歩きも良いものであると一人で結論を出して皆なの後をのんびりと歩く。ザンダ岩付近から神田さんが遅れはじめた。僕は肩の小屋までマイベースで来る。小屋の屋根では名雪さんがトカゲと決め込んでいるようだ。僕は神田さん

が来るまで皆なの食糧を遠慮なく食べる。神田さんが到着したところで出発とする。頂上に向かう頃から風が出でて來て、今までの春山気分はさめてしまつた。稜線ではさらに風が強く、時々体がふらつく時もある。一ノ倉岳付近で名雪さんが風の来ない場所を見つけたので、そこで休みを取り、腹ごしらえをしてから茂倉岳に向かう。頂でACC-I J恒例のバンザイをしてから一路土樽へと下山を急いだ。

(パーティ 神田・名雪・宇井・金・村田・窓所・金沢)

谷川岳幽ノ沢左方ルンゼ

一九七七年五月八日 中島 淳

この辺より、かなり足の痛みがひどくなる。ガリビエの数ペーティがいるのみで、ほとんどがV字に向つている。取付で、江平と鯉川、本団、私のオーダーでアンザイレン、江平ペーティが先行で、小さな岩尾根状の左側を登る。途中ややかぶり気味の所がいやらしい。取付より2PでT₁より左上ぎみに登るとルンゼに入る。正規のルートはルンゼの左側を登るらしいが、今日は滝になつていて登れる状態ではないので、ルンゼの右側にルートを取る。出だししかばり気味でかなり悪い。それに岩もビショビショで、ホールドやスタンスになるような所には、草や泥がたまつてある。今シーズン初めての本番なので、体が岩になじんでいないのか、かなり緊張する。

左側のルートと合流する手前で確保する。それより上部は傾斜は落ちるが、濡れているので快適とは言えない。夏のルンゼは楽しいが、早い時期のルンゼはあまり良いものではない。以後ルンゼ内を2Pで、小さなカンティ outgoing に出る。岩も硬く濡れていないので楽しく登る。それから先、ルンゼ通しに約5Pで終了する。取付より終了点まで四時間、さらに中央壁の頭へと雪面を登る。下降は堅炭尾根より、途中雪面を芝倉沢へとグリセードにて下

る。

この辺より、かなり足の痛みがひどくなる。ガリビエの靴は、岩登りには最適だが、アブローチの時には泣かされる。みんなより遅れて一人、新緑の山路を歩く。こんな時、谷川の美しさに一瞬足の痛さも忘れてしまう。楽しく、充実した谷川岳の一日でした。

(パーティ 本団一統・中島淳)

谷川岳幽ノ沢中央ルンゼ

一九七七年六月 鈴木 荘平

ある日曜日、例によつてクライマーで混雑する谷川岳の幽の沢の出合に、二人のクライマーが、腰をおろしていた。

まわりにいる登山者は、そろつてあわただしく、取付へいそぐ中を、この二人はいそぐ様子もなく、かといつて、見物にきたのでもなさそうに、何となく座つていた。

そのうちに、トコトコと、幽ノ沢の雪渓を登り始めた。「中央壁…。左ルート…。」などと、上部を指さし、何かしゃべりながら登つていく。どうやら、そのルートを登りに来たのらしいが、おかしい。というのは、二人は二俣に分かれている幽ノ沢の雪渓の左手を登っているのだ。右へいかなければ中央壁にはでないので。下を登るクライマーは、うすうす気づいたのか、首をひねつているが、やはり上をいく相棒のあとからついて登つていく。とうとう、中央ルンゼの取付近くまで登つてから、やつと気が付いたようだ。何やらボソボソと相談している。ドジなクライマーだ。いくらガスつてはいえ、こういうのがいるから、遭難事故が絶えないのだ。

「これから又、戻ると…」「いや、中央ルンゼは四級の一で、左ルートは四級の十で…」「こうなつたことは内緒…」「恥を…」。どうやら、中央ルンゼへいくことになつたらしく、取付へ歩きだした。

四五ペーテイの順番待ちのあと、このドジペーテイも登りだした。始めの六〇m程は傾斜のない二級のスラブ。このペーテイはコンテで登つていく。そのうちに一ヶ所、四m程の帯状のかぶり気味のソエイスがでてきた。こんどはスタカットに切換えたようだ。落ちは痛いと

いうことを、やはり知つてはいるらしい。四級のフェイスを登つて、また傾斜のおちたスラブを十五m程ザイルを伸ばしてビッチを切つたようだ。すでにルートは、上から下までペーテイがザイルを伸ばしている最中で、テラスという名のつく所は、どこもかしこも満員御礼だ。アイスクリームでも売れれば、多分、もうかるのではないだろうか。

このドジな二人は、それから三ピッチ、ルンゼとはいえない三級のスラブをヨタヨタと登つていった。やがて上方に黒い傾斜の強い、一部はハングした壁がでてきた。そのまま真下のテラスで又、順番待ちをしている。待つこと一時間半、やつと、登り始めた。頭上はハングだ。トップは右上して七・八mで小さなテラスへでた。細く水が頭上からしたたり落ちて、いやなテラスらしい。どうやらこの上が核心部のようで、ザイルの流れを心配して、ここでビッチを切つたようだ。さて、ラストは、そのままトップに立ち、テラスの上のカンテを五m直上にして、右へ二回のアブミかけかえで凹角に入り、そのまま直上、十五mほどつてから小さなテラスで確保した。このドジ連中は運がいい、いつもはぬれ歩いて、いやらしいこのピッチが、今日に限つて完全に乾いていたの

だ。五級下のグレードも四級に感じられたことだろう。ルートは、この上スラブが（一・二級）一〇〇m位続く。このドジ連中も、ここまでくれば、やれやれだ。

しかし、どこの会の連中なのだろう。

谷川岳幽ノ沢右俣リンネ

一九七七年六月 本図一統

いつものように、谷川岳登山指導センターの前で、東京の仲間と合流する。今日は幽ノ沢集中の例会山行のため人数が多く、賑やかである。A C C I J のよさはどの賑やかさにあるのかも知れない。出合から雪渓があり、短時間でカールボーデンに着く。

今日もV字はかなりの混雑のようだ。アンザイレンテラスで先行ペーテイにどなる「右俣リンネに入るペーテイはありますか」。返事なし。「それではお先に行かせていただきます」、又返事なし、返事なきものは、行つ

ても良いものだと解釈し、早速トラバースしてリンネに入る。最初の滝は、流水の左手に取り付き直上するとホールド・スタンス共になく、そこから二m下降し落口左のハング下まで登る。それからそのハングをアブミ使用で右側に乗りこし落口に出る。濡れており、ハーケンも浮いているので悪く感じた。二・三の滝を越すとチムニ一滝に出る。左右ともに行けそうだが右手に取り付く。ハーケンも打つてあるが、二・三mの垂壁が悪く苦労しいか。それとも自分の実力がないのかも知れない、もつとトレーニングをしなければ…。最後の滝は、佐藤が二〇m登りビレー。二ピッチ目は小ハングをハーケンをホールドにして越し、細かいフェイスを直上すると、右にトラバースするか、このまま直上するか迷う。右にトラバースすることとし、カンテを廻り込むと、流水に向つて三m下降し流水を左岸に渡る。左岸を直上すると落口に出る。四〇mいつぱいでぐんぐん登るとV字ペーテイと中央壁ペーテイがコールをかけてきた。適当な所から右にトラバースして中芝新道に出て、（ペーテイ 本図一統・佐藤正章）

谷川岳幽ノ沢

中央壁直登ルート

一九七七年六月 村田 勉

今日の幽ノ沢は、会山行なのにぎやかだ。そのせいか早朝悪かった天気も徐々に良くなつて来た。大滝もまだ雪渓の下で右より樂に越えられる。V字へ行く連中、左方ルンゼに行く仲間とそれぞれ別れ、今日のパートナーである金ちゃんと二人きりになる。

上に見えるハングを目指して真直ぐ登るルートは濡れていて悪相の為、T₁尾根の右側を登り、ハング下の左よりから中央にトラバースする。ドロまじりで滑り易い所がある。ここまで四ピッチ。ハングを人工で左上し、フリートとなつて五m登り、いやらしい横型ハーケンをつかんで左へ二mトラバース。上昇して正面フェースルートと合流するテラスへ着く。厳しいフリーである。正面と同じルートを二ピッチ登るが、ハングを越えた所より左へ行く。正面は上へ。快適なフェースを二〇m登り、左の草付へ出て三ピッチで上部ハング下へ。右の草付リップ

(パートナー 村田 勉・金 雅男)

ジを真横に廻り込み、濡れた草付岩場を登る。二五m位である。太陽が西に廻っている為に、急に暗いじめじめした雰囲気となる。ブッシュを一〇m程登り、右の広い岩場へ出て、トラバース氣味に右上する。左上を見るとボルトが有るのみで四m位左上すると、比較的よい小テラスへ出る。次が最終ピッチで、頭上の尾根には明るい光がさしている。しかし、出だしの五mが悪い。傾斜がきつい上に、浮石があるので緊張する。後は慎重に登る。最後のちょっとした垂壁を思い切りよく登れば、光に照らされる尾根上に出て暗い登攀から解放される。光の明暗も含めて、終つたと言う実感を強くする後半の三ピッチである。



山への誘い

山上若子

最近ようやくわかつてきましたみたい。私の好きな山つていうもの。美しいものたちに会いたくて行く。行きたい。街をはなれて、みられるものは、遠くかすんだ地平線山波に暮れてしまつた残照の壯麗さ。山深いふところにだかられているここちよさ。ものすごくきらめく星たち。そんな美しいものたちに心を奪わることによつて、ときはなされる心。飛んでいるんだっていう感じ。

これがたまらなくほしくなつて、地上では手に入れられないから、重力にさからつて高い所まで行く。だから山じゃなくてもいいわけなんだと思う。世界地図にのつてゐるゴビ砂漠やグランド・キャニオンだつていい。そんな不得体の知れない大きさが広がりの中に立つていて思つ。日本にはそんな場所一やつぱり山だから。ACCIJに入つて、はじめて岩をやつたけど、岩へは他のみんなほどには好きではないようだ。



け谷川岳幽ノ沢V字右へつれていつてもらつた。夢中になつてはい登つてゐる間、わずらわしさがなかつた。上へるまでに夢中だつたから。そしてホッと一息ついて見廻わす山々がとても素敵にみえた。そんな感じが好きだ。

逢いたいもの達に会えない時もある。はじめから逢いたいもの達がない時もある。そして思わぬものにあえる時もある。今までいくつかの忘れられない山行、そのすべてには想像以上の美しさ、楽しさに会えたものばかり。まだ会つたことのないものの達に、それと私の知つているもの達に会いに行くため『また山へと行く』。

ACC-I 救助訓練

践してきた人である。
たまたま、当会でも遭難救助訓練の話が起きていたので、渡りに舟という事で講師としてお願ひすることとなつた。

一九七七年六月五日 吉田信一
場所・三ツ峠
参加メンバー・全員
講師・清水清二氏

ACC-Iに於いては、このところ会員数が多くなりメンバーも若い人達が多くなつた。旧メンバーも山行日数等が少くなり、そのかわり新メンバーの山行が多くなつた今日、事故等の不安がリーダー、会長等の話の中に出るようになつてきた。

たまたま私の会社の得意先に、スポーツメーカーのエバニューがあり、その担当者だつた人が、清水氏であつた。得意先で山行の話などしているうちに、清水氏が、遭難救助のベテランであることがわかつた。氏は鵬翔山岳会のメンバーであり、多くの救助のリーダーとして実

訓練は、三回ほどしか行なつていないので、いろいろなことに感じ、反省するところである。

まず、救助訓練が計画的でなかつたこと。今後、救助

訓練は最低年一と二回を定期的に実施し、常に訓練をしていないと、いざという時には、行動できないであろう。又それは各自にとつてもよいトレーニングになり、行動においてもプラスだと思う。それにACC-Iにおいては、救助訓練マニア等を作成し、それに基づき今后の指導としたい。

最後に、講師・清水氏に対して、いろいろ気付かなかつた点が多くあつたので、反省をしたい。また「組織メンバー」の中でも、特に木村君が良くやつてくれたので感謝したい。

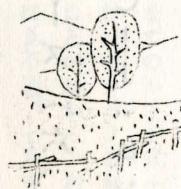
忘れられない花

吉田智枝

昨年の夏、初めて滝谷に入りドーム北壁を登つた。ピッチ登つたテラスの上のフェースのリスに、イワツメクサの花が並んで咲いていた。

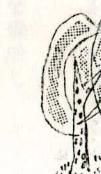
つめたい灰色の霧にとざされ凍りつくような沈黙のなかに
かすかに
あなたは やさしく
挨拶をしてくれた

暗い碧の闇のなかで
さびしい光のまんなかに
あのフェースに咲いていた
それは透きとおるような
白く あわい
小さな花だつた (「イワツメクサに寄せて」)



ブラツツ・ヨーズ（六、一九一m）試登報告

ACC-1・ヒンズーラジ登山隊



一九七六年五月一八月の記録

本田一統

我々、二〇名たらずの小さな山岳会で、ヒマラヤ登山隊を出すということは、いろいろと無理事が多かつた。それでも「ヒマラヤ」への夢を実現させるべく三年の計画をたて、やつと七六年に日本を出発することができた。しかし残念ながら、この遠征は失敗に終つた。我々の山岳会は、国内外において岩登り中心の山行を実践しており、ヒマラヤでも岩登りをしたいという希望からブラツツ・ヨーズを選んだ。

ブラツツ・ヨーズは、ツイ岬の南にあり、西面は一、五〇〇m以上の岩壁となつており、ガゼン氷河から撮影した写真から登攀は不可能と考え、今まで未知の氷河であつた東面のジャルサバール氷河からアタックすることとした。

六月十九日、ジャルサバール氷河三、三〇〇m地点にBCを建設する。この氷河は、一、五〇〇mと二、五〇〇mの岩壁に囲まれており、どんなピークに登ろうとしても、一、〇〇〇m以上の岩壁を登らなければならぬだろう。しかも、我々の登ろうとしているブラツツ・ヨーズは西面より大きな岩壁をかまえて一番奥にそびえている。六月二六日、三、七〇〇m地点にC₁を建設する。C₁の位置はブラツツ・ヨーズ東棟の基部であり、C₁から頂上まで二、五〇〇mの大岩壁となつていて。ジャルサバール氷河は、東棟によつて左右のアイスフォールに二分しております。右側のアイスフォールはとても悪くルートにならないため、左側アイスフォールにルートを求めることにする。ルートはアイスフォール左岸を登り、サウ

スコルからは約四〇〇mのフェースを登り、岩陵づたいに頂上へ出るつもりであつた。二名はアタック隊、あと三名は荷上隊とし、六月二七日には、アイスフォールにルート工作を開始した。六月三〇日には、四、四〇〇m地点までルート工作を終了、しかしその日の夕方、ルート上に東棟から土石流が押しよせ、フィックスザイルをズタズタに切断される。七月一日、不運は続き、荷上隊三名及びエゾン・オフィサーとコックがC₁に登つた後氷河上にある湖（アブレーションレイクというらしい）が決壊し、その土石流のためBCが流失してしまう。全隊員はBCに下る。登山活動を一時中止して流されたものを捜すが、水につかつた食糧はほとんど使いものにはならなかつた。その結果、行動食のほとんど全部、トイレットペーパー、電池、装備の一部を失なう。

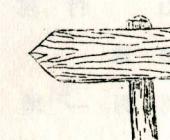
ミーティングの結果、やれるだけやるということになり、アタック再開。七月四日、二バーテイに分け、一バーレットは右岸を登る。その結果、今までのルートは土石流の通路になつてしまい、その上部は、セラックの崩壊もあつてルートとしては不適であることがわかる。右岸ルートは上部に大クレバスがありやはり不適。七月五日もうひとつの可能性のあるルートとして、アイスフォ

△隊員構成

隊長・涉外・医療	本田一統
輸送・記録	阿部博
装備・会計	木村一
食糧	金雅男
リエゾン・オフィサー	杉山善男
モハメット・シリーン	

<行動日程>

5月17日	本図、阿部 ピンディ着
24日	木村、金、杉山 " 着
6月11日	ギルギット着
14日	ギルギット発
15日	バランダス着
16日	キャラバン開始 ~ハルブまで
17日	~ラシュート
19日	B、C建設
26日	C ₁ 建設
30日	4,400mまでルート工作
7月 1日	B、C流失
4日	アタック再開
5日	登頂断念
9日	B、C撤収
10日	ハルブ着
11日	イシン着
14日	ギルギット着
28日	ピンディ着
8月 4日	ビンディ発、帰路につく。



谷川岳一ノ倉沢

中央奥壁直上ルート

阿 部 博

山々が色づき始める頃、ある後輩君より谷川行を誘われた。久しぶりに山へ行ける喜びが先行して、深く考えずに承諾したのが悲劇のはじまりだつた。「そろそろ行きませんか」の声に寝不足の目をショボつかせながら体を起こすと、彼はもう身仕度をしている。煙草を吸いながら、水上まで戻つて風呂でも入りグッスリ寝たいと思うのだが、このささやかな願いも山気違いと同伴であるゆえに、はかない望みと諦めねばならない。

女性のパーティや同伴のパーティに出会うと、突然狂つて暴れだす。こんなことは、アシュラの時に経験済み、あわてず、さわがず、畜生法師のように複雑怪奇な気運い。ヘッドライトをつけるころ、アシュラの弟君は、横で軽い寝息を立てている。彼の表現力不足の無愛想な顔が、今は不思議と天使のように見える。「今日は、おつかれさん、又いつしょに行こうな!」。返事がないのを知りつつ言つてみた。

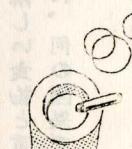
冷たい沢の水で、顔を洗つてもいつこうにスッキリしない。頭がいくらシカカリしろと命じても、「岩にはつまづく、雪渓ではバランスを崩したり」言うことを聞かない我身が情無い。餓死しない程度の淋しい食物と重い荷にあえぎ、死ぬような恐しい目にあい、何の因果で育ちの良いこの俺が、と思うのだが…。

無愛想で僻みっぽく、注意力散漫、呑氣者のアシュラ

(パーティ 阿部 博・アシュラの弟)

谷川岳 一ノ倉沢・

変形チムニー



一九七七年七月十日 富所正利

今にも泣きだしそうな空模様の中、息を切らせながらテールリッジを急いで登る。今日のルートは、以前からぜひ行つてみたいと思つて何回かお天気や、岩の状態が悪く登ることの出来なかつた、変形チムニーである。パートナーは藤原さん。その他に茨城の木村・中島パートナーも同じく変形チムニーに行くことである。

息を切らせながら取り付きにつく。誰もいない。さつそく用意をし、自分がトップで登りだす。いつものことながら、最初のピッチは体がかたく緊張する。二ピッチとれるらしいが、自分は真中を登る。茨城の中島さんは左から登つてきている。チムニーの下で切る。茨城パートナーが先に登る。その間我々は、俺がトップをやるいや俺だ!!ともめるが、結極、自分がトップで登りだす。チムニーの上で切り、藤原さんが登つてくる。あとはツ

谷川岳 一ノ倉沢

コップ状右岩壁左カントルート

一九七七年七月十日 本図一統

ルべでどんどんピッチをかせぐ。中央カンテと合流する。ここからは、一人ともすでに登つたことがあるので、なんだかんだ言いながら登る。鳥帽子岩の下まで行き、ザイルをたたんで、四人そろつて昼食をとる。ここから一ノ倉岳までだが、五ルンゼの頭が昨年よりも、もつとヤバくなつてゐる感じがする。いつの間にか、ガスもなくなり、ハアハア言つてはいるが、ひょっこり一ノ倉岳へ出る。ひと休みしてから芝倉新道を下るが、相変わらず悪い道で、ズボンは真っ黒になつてしまつた。

(パートナー 藤原雅一・富所正利)

する。一服しながら正面壁の方を眺めてガスが相変わらず濃く白いカーテンを見ているのも同じである。スラブは何回か登つたことがあるのでルートファインディングは簡単だが何回登つたことあるアルファルンゼ出合附近は悪い所だ。取付で朝食とする。いつも食糧はさびしい我々であるが、今日はバイナップルなど豊富だ。トップは金、セカンド吉井、ラスト本図のオーダーで登攀開始七時。一ピッチ、洞穴まで一〇m直上する。一ピッチ、外傾したツルツルの悪いバンドを右に下降トラバースし人工で灌木バンドに這い上る。こういう所はラストが一番苦労する。シユリングを使用してやつとトラバースを終える。灌木バンドは三人は集まないので私はアブミビレーとなる。三ピッチ、人工でフェイスを直上し三mのハンクを乗つ越すと二〇mでレッジに立つ。四ピッチ、逆層フェイスを左上すると十三mで枯木テラスに出た。ここには一ノ倉全壁トラバースに使用したと思われるフックスザイルが残されている。五ピッチ、細かいフェイスを右斜上しカントに出てから、これを直上右側のレッグに移る。十五m。このレッジは五m位の長さがあり右端は同志会ルートのテラスとなつていて、ここから下の灌木バンドまでファックスザイルがあり、これを取りは

出合から空を眺めるがあまりかんばしい天気ではない。しかし敗退する程悪くもない。それに今日のパートナーは金と吉井なので心強い。さあ行こう。出合発四時五〇分。本谷雪渓から衝立前沢に入り略奪点に出て小休止と

ます。六ピッチ、頭上のハンクを乗り越し人工とフリーで直上後左のピナクルにトラバースするがこれがきわめて悪い。ボサテラスよりカントを登り右側に出るとパンド状テラスへ、三〇m。私達はRCC IIの日本の岩場を持参したが、このルート図はピッチ間の距離の誤差が大きく、あまりあてにはできない。七ピッチ、人工で左斜上し凱旋門の登攀となるがガスの切れ目から見える眺めはかなりの高度感がある。二〇mでテラスへ。八ピッチ目は左手のカントを直上するが脆くトップの金も少々手こすつてはいる。落石も時々ある。四〇mでテラスに着いたとのコールがあり私も登り出すが悪く感じる所だ。テラスに着くと右手から同志会ルートが合流しており、これが事実上の登攀終了点であるが我々はもう一ピッチ三〇m灌木帯を登りザイルを解く。十三時。今日私は終始ラストで登つたため気楽に登攀させてもらつた。トップの金と吉井に感謝しながら、もうれつなヤブコギをしばらくすると五ルンゼの頭の少し手前にて、やつとヤブコギから開放される。頂上着十四時四〇分。中芝新道を経て一ノ倉沢出合着十七時。ごくろうさんでした。:

(パートナー 金 雅男・吉井清二・本図一統)

谷川岳 一ノ倉沢鳥帽子

奥壁ダイレクト登攀

一九七七年七月二十四日 金 雅男

上野発の夜行列車に乗り込む。土合着。良くもない悪くもないまあまあの天気だ。私のパートナーである本図氏は車で来ていたので一ノ倉の出合まで車で行く事にする。これから行くルートは、本図・金のほかに吉井・木村のパーティも行くというので明るくなりかけた頃に出合と一緒に出発する。テールリッヂを登り取付についたのが六時三〇分。

鳥帽子スラブ末端の、鎌形ハンギングの右側から私が取付く、七時。逆層の岩を右斜上ぎみに登る。一ピッチ目のテラスでビレー、本図が登つてくる。そのまま本図が凹角の中に入り草付とのコンタクトラインを登つていく。「ザイルはあといくらある!!」コールがかかつてくる。「あと五メートル」。五メートルじや二ピッチ目のテラスまでいけないとひうでの私が五メートル登る事にする。「OK!いいよ」、本図が逆層の岩をトラバースする。

が十メートルばかり登り正規のルートのビレー点へ着く。後続パーイも苦しい登攀を強いられてるようだ。私は確保点まで登りすぐ五ピッチ目の凹角へ入つていく。ボルトが一本打つてある、その上にハーケンが一本、アブミをかけその上はフリーで登り、そしてトラバース。のつべりとした岩でホールドが全然ない。ブッシュホールドとフリクションの微妙なバランスクリミングだ。やつとの思いで三寸バンドへ着く。アブミビレー。六ピッチ目、本図が行く、最初の三メートルばかりの細いフリーを強引に乗越し直上。アブミのかけかえのようだ。私が登る。初めの三メートルのフリーを強引に乗越そうと左足を壁にはりついているような鋭角の岩にたつたときである、その岩が剝がれて私の右足のつまさきに突きささるような感じで落ちた。「落石!!」、声を張りあげて叫ぶ。六〇センチ位の岩たつたから、後続パーイが非常に気になつた。幸にも、真下には居ず、横のテラスにいたので逃げる事が出来たようである。岩はものすごい反響音を残しながら鳥帽子スラブを落ちていく。私も危うく落ちそつになつたが、第一関節にかかつて居る右手のホールドと右足のわずかなスタンスで耐える事ができた。と同時に右足の指にものすごい痛みを覚える。でも

このままでは腕力がなくなるので精一杯の力を出しなんとか乗越し。人工とフリーのミックスで確保点まで登る。右足指の痛さが非常にこたえるので靴をみたら五ミリ位の穴があいているではないか。たぶん出血してたんだろう、これから先の登攀が心配になつてきた。でも気力をだして登る事にする。七ピッチ目、チムニーの中を入つていくがぬれていて悪い。バック&ファット、ザックが非常に邪魔になるが何とかきりぬけ、草付と岩のミックスを登る。草付がユッサ、ユッサ、今にも落ちそう。最後の乗越、左手でブッシュをつかみ、右足をハングぎみの岩の上にのせ、上半身をのりだし乗越し。このピッチはザイルが思うよう伸びず、又体力の消耗もいちじるしい。本図が上がつてくる。そのままスラブを直上していくが、岩がもろいようで、落石には充分なる神経を使つているようだ。四〇メートルいっぽいにザイルがのびる。私が登つていく。つま先でたつと、右足にものすごい激痛がはしる。確保点までなんとか登る。あとはジエードルと草付の二ピッチ残つてはいるが、上部は岩が非常にもろくそのうえ落石も多いといふことらしい。ほとんどのパーティはここからエスケープしているらしい。私達もここから、南稜の終了点の上部あたりへ真横にトラバースす

る。登攀終了（十時三十分頃）。懸垂岩までいき、中央カントにエスケープした、吉井・木村バーイティを待つ。吉井・木村バーイティが登ってきた（二時三十分）。これで全員そろつた。帰りは中芝新道を下山する。

（バーイティ 本図一統・金 雅男）

谷川岳 一ノ倉沢

衝立岩 A 字ハング登攀

金 雅男

一ノ倉沢はあいかわらず、クライマーで賑わいを見せており。ほんの数時間前に雨があがつたらしい。ガスがかかつていて衝立岩もたまに顔を出すくらいだ。今日のペードオーは本図氏。五十メートル下降をし、テールリヅヘ、壁はぬれてい。六時三十分、中央棧基部。ここで登攀具をつける。

トランバースし、アンザイレンテラスへ向かうバンドの小ピナクルから取付（七時）。一ピッチ目、本図がブッシュをかきわけながら、ザイルを四十メートルいつぱい

いく。七ピッチ目、四角、カンテのV級のフリーだ。体を突張りながら私が登っていく。ハーケンは結構打つてある。でもねれているので慎重に登る。乾いていたら非常に快適だろう。この壁に取付いてからやつと足が伸びせる。広い石楠花テラスにて。本図が登つてくる、までは水を一杯。そのままアブミのかけかえで直上。九ピッチ目、Aのハングになつていて難なくあつさり乗り越す。ここからはコンティニアスで衝立の頭まで、久びさのロングクライムだつた。ガッチャリ握手。登攀終了三時。北稜を下降。出合で幽ノ沢のバーイティが待つていた。

（バーイティ 本図一統・金 雅男）

マツターホルン北壁登攀

一九七七年七月二十五日 鈴木 荘平

朝三時、まだ夜のあけやらぬ中を、私達四人は、取付へと急ぐべく、セラック帯（北壁のそくまどつて、いわば断層）の登りだし口にいた。ここから取付となる北壁

下部の氷壁地帯まで約100m、二ピッチを登らなければ取付くことができないのだ。

ザイルをとりだし、ヘッドランプのあかりをたよりに黙々と登る。さらに、右へ200m程トランバース。前日に登つたバーイティのトレースがありがたい。下部氷壁帯の正面にまわりこみ、シルンドの閉じた地点から取付く。周囲がやつと闇の世界から解き放される。ザイルのオーダーは、鈴木・高橋、そして杉山・宇井の二バーイティに分かれれる。

最初は約四八度位の氷壁。しかし、氷はでていない。冷え込みがなく、雪もしまつていない。ピッチを稼ぐにつれ、ふくらはぎが痛みだす。時々、バケツを堀つて休む。さまあない。トレーニングのたりない罰だ。傾斜のゆるいのだけが救いだ。十一・一二ピッチも登ると、問題のクーロアールがみえ始めた。この先、ルートは、このクーロアールをつめるのだ。クーロアールの入口近くは、岩壁帯となつている。そばまでいつてみると、どうやつてクーロアールに入るか、遠くでみた程ハッキりしない。

先行の杉山・宇井バーイティは直上を試みる。かなりむずかしそうなので、鈴木・高橋バーイティは右へトランバース。

に伸ばす。二ピッチ目、壁がぬれていて悪い。フリーから人工（三十五）。ここで一ルートのテラスと合流。三ピッチ目、本図が大きな一枚岩をかかえながら、ハングを越し灌木のあるテラスへ。四ピッチ目、いよいよA字ハングだ。私が登つていくが、ピンが見当らない、上にはあるがそこまで届かず、ルートが間違つてゐるんじゃないかと思い一時下へ降り、右側のボルトが連打してある方を登る事にする。六メートル位登るが、ボルトは直上しているではないか？ トランバースしながらA字ハングには入つてない。再下降、今度は本図が最初私が登つた所にハーケンを一本打ち、今にも落ちそうなグラグラめている小ピナクルにシユリングをかけ、それにアブミをセットしながら恐る恐る乗越す。さすがだ。A字ハングの直下で確保。私が登つていき、そのままA字ハングを登る。ハングにはハーケンが一本より打つていないので、そしてまた遠く、乗越には苦労する。アブミ回収できず、もう一発アブミを出して登る。ハングの上でアブミリレー。本図も苦労しながらアブミを回収してきたようだ。二人共、上からのしやすく全身がぬれ寒い。体力の消耗が激しい。それにもめげず、六ピッチ目、本図が軽快なテンポで、フリーと人口のミックスを登つて

スして直上、結局先行の杉山・宇井バーイも後続する。このピッヂを区切つたテラスは、北壁を登りだしてはじめにみつける、腰をおろして休めるテラスだ。時間は十時半。上部のルートをよく見定めながら、又登りだす。

クロアールというよりは、浅い凹角だ。そしてかなり広い。岩はも多い。こんな岩の積重ねで、よくこの山が崩れてなくならないと思う。氷と雪は、かなりいやらしい。うすくて、もろいのだ。時々、下の岩にハンマーが当たる。だましながら登る。およそ「快適な登攀」とはいえないクロアールを単調につめていく。約八ピッヂ程登ると、上部に行止りを思われる、立つた壁が現われてきた。

クロアールは、ここから左へ折れ曲って、スイスがわ頂上の肩へと次第に元細りとなるのだ。どのあたりから右へクロアールを抜け出るか、考えながら登つていく。登攀の記録では、ここのことのルート選択次第で苦労するか、しないで登れるかの分れ道となるらしい。結局、立つた壁のすぐ下から右へ一ピッヂで抜け出した。これで落石の恐怖が少なくなるかと思うとホッとした。雪のブロックもすごいが、岩は人間の頭位のが落ちてくる。雪が少ないともっと大変だろう。ここからルートは

と、柔い日光が当たるテラスにてた。時計をみるとすでに十一時半だ。ここで行動食をとる。

ルートをまちがつたりして、だいぶ時間を食つてしまつた。こんどは二ピッヂ雪壁を右へトラバース。冷え込みがゆるので、雪は締つていない、いやらしい感じだ。

トラバースをしていると、下からイタリア人二人ペーティが我々に追いついてきた。今朝取付にみえた二つのヘッドランプが彼らだったのだ。我々のスピードのなさを反省しなくては。早い、彼らに先をゆつた。そのうちの一人が英語を話すので、ルートをたずねてみる。やはりここでよさそうだ。大きな岩を右から廻り込み、大きなルンゼへと入る。氷とのミックスのゆるいルンゼを直上、二ピッヂ、右へトラバース一ピッヂ、凹角からリッジを越す。一ピッヂ。この頃になつて、ようやく正面にみえる迫力のあるダンブランシュー（四、三五七m）のピックがほほ、同高度に見渡すことができた。あとひとふんぱりだ。ツムット稜もみえてくる。

それから六ピッヂ、雪壁を直上。まだか、まだかといながら登つていると、突然に頂上にでた。イタリア側頂上だつた。ほほまつすぐに登つたのがよかつたのか？ 立派なトレインを左へ十五m、少しおりると十字架があ

二つに分れていた。直上するか、右へ二ピッヂ程トランクして登るかだ。ともかく、ザイルを伸ばす。時間はすでに五時すぎ。ビバークを考える。

もう少し登つて様子をみてみる。しかし、それから一ピッヂいつた所、右へトラバースを始めた所でビバークとする。後続の杉山・宇井バーイは、二ピッヂ下でビバークの体制に入つた。ビバークは、四〇センチ程雪を削つただけの所、腰をおろすのがやつとだ。下は岩、これ以上ひろげようがないのだ。心配している天気だが、気味悪いほどの快晴、あすもつことを祈るのみだ。気温が高く、冷え込まないのが気になる。

翌日、登攀開始六時半。最初は右へトラバース、一ピッヂ。小さいリッジの側壁へと出る。ハーケンがみつかつた。ルート中、五本目の残置だ。一〇m程登るが上部はハングしており、大きなパイプハーケンがみえる。どうも別なルートらしい（ボナッティルート？ それとも他の？）。ノーマル・ルートではハングはないはずだ。又下へ戻る。今度は、きのう考えた直上するルートへと登るべく戻つた。そこから左へトラバースして二ピッヂここだけ傾斜がきつい。（ここはルート中の核心部となる）。あい変わらずもろい岩に苦しみながら抜けできる

つた。セルフブレイをとりすぐ確保、「ついたぞ！」と下へどなる。二時ちょうどだつた。

夕陽のなどりが足もとを淡くオレンジ色に照らし出していた。

— その後の反省 —

○ やはり、体力のなさとルートファインディングの大切さをあらためて感じた。

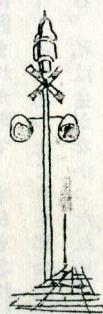
○ ヨーロッパの連中は、今ではこの北壁（ノーマル・ルート）は一日で登るのがあたりまえのようだ。

○ ルート四級、ピッヂグレード四級十、妥当な所だとと思う。

○ 日本的な壁だ。クラックやチムニーが全くない。いやらしさも同様。

○ 全ルート、アイゼン着用であつた。

（バーイ・鈴木莊平・高橋 敦・宇井正利・杉山善男）



ヨーロッパ紀行



一九七七年六月一十月 高橋 敦

シヤモニ発六時のバスに乗った時から、私一人のヨーロッパ旅行は始まつた。

イスでは見学というよりも、九月八日に来る友との待ち合せが目的だつた為、二日づつ、ジユネーブ、ローザンヌ、ベルン、ルツェン、チューリッヒに泊り、いかにして、その日を安く時間を潰すかという目的につきました。イスはさすがに観光の国だけあつて、どこの町も美しく思われたがどうも若者が何日もいる所とは思われなかつた。

ミュンヘンに入ると、さつそく本場のビールを飲みに行く。さすがドイツのビールだけあつて一リットルのジョッキーであつても最後の一滴までおいしく飲めた。ミュンヘンでは一週間ベンツヨンを借りた。そのお姉さんは、まさにドイツ美人といつても過言ではなかつた。

その間に私は、オーストリアのインスブルック、ザクブルック、ウイーンの見学に向う。インスブルック、ザクブルックは、まさにドイツ美人といつても過言ではなかつた。

がなんと、七百円もするのには驚かされました。北欧に来て感じたことは、遊ぶ所が全くないようで、その点日本は天国だと思いました。

金がないので、北欧三国は三日間で終らせ、ハンブルグで休息を取り、オランダに渡りました。アムステルダムの思い出は、きたない運河に囲まれた街でヒッピー、アラブ人が多く、風車はどこにも無く、オランダ人に言わせると、アムスはオランダではないと言いますが、まさにそう思いました。けど、チーズが有名だけあつて、チーズの食べ歩きはゆつたりとした気持でできるようです。

ベルギーは、日本とはあまり交流がないらしく、一万円を両替したら、ドルで七千円分しかないでガックリ。買物は北駅附近がおもわぬ掘り出しものがあるようです。ベルギーからイタリアに下つた私は、あこがれのベネチアでゴンドラに乗りました。ベネチアで風邪をひいてしまつたので、今まで貧乏旅行していたが、ここで病気になつたら日本に帰れないと思い、毎日ピフテキを食べるようにしました。ピール、ピフテキ、スペゲティで七百円ぐらい。新婚旅行では、ぜひベネチアを入れるべきです。

ザツクブルックは、山に囲まれた町で、半日もあれば全て見学できる所だ。ウイーンは思ったよりも都会的で車が多くうるさい所である。私は金がなかつたため、とうとうワインナーコーヒーと名物のケークを食べずにミュンヘンに帰つてしまつた。帰つたその日がちょうどミュンヘン祭で、さつそく祭を見学に行つた。公園の中にドイツのビール会社がテントを張り、日本で思つたとおりのもので夢のような夜を楽しめました。

フランクフルトは一日しか泊りませんので、本職の目で見て、フランクフルトソーセージはどうちらかと言うと日本のサラミソーセージに似ているようです。フランクフルトからハンブルグまでバスに乗つてロマンチック街道を見学して来ましたが、古都や城など見あきてしまつていた私には、これといつた所はありませんでした。

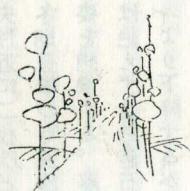
ハンブルクは、ハンバーガーの発祥の地だそうで、本場のハンバーガーはどんな味かそれを楽しみにハンブルグに足を入れてしまつたのです。おいしいハンバーガーはレーベーバーン通りに売つており、多種多様で、安く食べられ申し分のない所でした。

ハンブルクを基点に、デンマーク、ノルウェー、スエーデンを見学に行きました。北欧は物価が高く、タバコねばるのはかなりきつかつた。

フイレンツェでは日本人の女性と知り合い、五日間行動を共にしました。二人でトレビノの泉に行つた時なんかは実にドラマチックでした。日本でもてない人は、ぜひイタリアに行つてもらいたいですねー。

ローマ、ナポリは、思つたよりきたない町で、本当の下町という感じでした。

バルセロナでは、世界で一びきのブランコゴジラ、スペイン語ではゴジラブランコを見に行き、闘牛を見学したが、シーズンの最後の日だったので少々寒いでした。マドリードではフラメンコを見学、一ぱいの酒で四時間ねばるのはかなりきつかつた。



穂高岳滝谷合宿

一九七七年七月二日～三日 中島 淳

今年の夏山合宿は、個人山行という形で行う事になつた為に、会社を辞めて暇な江平君と、いつでも休みを取れる私とで、一度も登つてない滝谷でも行こうかと言う事になり、梅雨が明けるであろう七月二十日頃より約一週間という予定で計画を立てる。それに学生で暇な藤原君を加え三人での滝谷合宿となりました。

予定していた時間より大分遅れ、松本よりタクシーの相乗りで上高地に入る。早朝の松本駅でのトラブルで気持が沈んでいたが、穂高の山々を目前にすると何かしら晴々とした気分になる。暑くならないうちにと急いで出発する。明神池で朝食をとり、藤原君が持つて来たラジオカセットから流れる音楽を耳に北穂へと急ぐ。涸沢まで来ると荷の重さにバテてしまい三時頃まで昼寝をする。それから北穂のテント場へ着いたのが六時頃でした。

翌朝四時半起床、東の空がかなり明るい。今回の食糧係である江平君自慢のインスタントうどんを食べ、四尾中央稜より右上して南稜を登つてしましました。三日も続けて行動していると、一日テントの中でゴロ寝でもしていい気持ちになつてくる。天に気持が通じたのか、夕方から雲つてきたので、明日は雨だと喜こんでシュラフに入れる。

朝の眩しい光で目を覚す。快晴である。しかし今日は何となく登りたくない。三人で話し合い一尾根と滝谷で一番グレードの高いP2ジエードルを登る事に決める。一尾根はフェースが連なつて構成されているので尾根といふ感じはまったくない。取付から人工とフリーのミックスで登る。途中ルートを間違えて極度に悪い凹角を登る。その後三級程度の容易なP2で北穂の頂上に飛び出す。頂上で休んでいた多数の登山者の注目を集め優越感を味わう。小休止ののち、滝谷最後の登攀であるP2ジエードルへと向う。取付より四Pほど三級程度のフェー

スを落石に注意しながら登る。五P目、ややかかりぎみのフェース、これを腕力で乗越す。六P目、悪そうな凹角である、藤原君が強引にフリーで登つっていく。出口付近でコツヘルくらいの石を落す。これが運悪くザイルに当り切断、真青である。どうすべきか考えた末、三人で一本のザイルで登るのはルートからいつて困難である為根登攀へとC沢を下降する。四尾根Cカンテ下より懸垂でツルム正面壁へ取付く。壁の中央付近に一枚ほどカラビナが残置されていた。おそらく冬期登攀の時残置されたのである。冬の厳しい滝谷の姿を想像する。藤原君が難無く終了、C沢右俣奥壁からは絶えず自然落石がある。この中を奥壁に取付こうとコルより下降するが、あまりの落石にやむなく中止、しかたがないのでダイヤモンドフェースから中央稜を登る。滝谷のルートは短いが谷川岳などには少ないチムニー・クラックなどの内面登攀が多いので良い練習になる。ダイヤモンドフェースを江平君がトップ、中央稜を中島がトップで登る。テントに帰つたのが六時頃、昨日の疲れと重つてクタクタになる。苦労して担ぎ上げたウイスキーがとても美味しい。山で飲む酒は安物でも美味しく感じるから不思議である。滝谷二日目はクラック尾根。P2フランケ、ドーム西壁を登る予定でB沢を下る。昨日のC沢同様にこのB沢も碎石が多く落石に気をつかう。クラック尾根は変化に富んだ楽しいルートでした。P2フランケは垂直な壁に走つているクラックにそつて登るもので、高度感があり、全部フリーで登れたのでかなりのハイスピードで登れました。続くドーム西壁は、ガスの為に取付を間違えて中

下降する事に決める。二〇日二回の懸垂でP2フランケに回り込む事が出来て安心する。

以上が滝谷合宿の登攀でした。最後に思わずアクシデントで新品のザイルを失いましたが、天候に恵まれ、技術的にも精神的にもこれから山行にかなりプラスについた合宿でした。

翌朝、思い出深い北穂を後に奥又臼へと向う。
(パートイ 中島 淳・江平尚志・藤原雅一)

夢の岩壁……『滝谷』

松原文夫

いろいろと岩壁を登つたけど、滝谷ほど登れない岩壁はなかつた。けれどやつと十二～三年目にして初めて登ることができた。ある時は雨で、ある時はパートナーが『ボク帰る』とK君が降りて来てしまい登れなかつたり、何度も行つては帰る夢の岩壁であつた。ところがパートイがいいのか、「トミー・佐藤君」とで、あこがれ

の岩壁へ登ることができた。それはこんな山行であった。二人は二、三日さきに入つて、あとから合流した。北穂高への南稜の登りのきついこと、きついこと。『夢の岩壁でいい、登れなくてもいい』と何度も思いながら重い足をひきすりながら登る。これはひょっとすると、人間を長くやつた人の仲間入りかもしれないと思いつながら『おれは若いのだ』と自分に言いきかせながら、

(事実は仕事のやりすぎで疲れているのだゾ)やつとのことで北穂のテントに着く。温かい飲みものを飲むと、なんと若いのですぐに元気になる。二人とも今日は北穂まで登つてこないと思っていたそうだ。バカめ、意志と愛情のかたまりのおれを知らないな。二人に『ドーム北壁でも行くか』と言うと、彼らは『行かない』と言うと思つたのに登ることになつてしまつた。自分の足にお願いをしてついて行くことにした。初めて登る滝谷は、どんな所か楽しくなつてくる。コルから下降するとすぐに北壁にでた。右ルートを登ることにした。取付が午後三時ごろだ。チムニーから始まるルートである。トミーがトップで登り、佐藤と二人で登つて行く。反対側では北穂チムニーを登つている。大きなチムニーが真すぐに入つている。二P目もチムニーで、最後は簡単にフェース

を登りドーム手前の頭にてて終了した。短かいルートだけどおもしろい所だ。久しぶりの夕暮れの山稜はなんと多い、いい気持ちだ。南峰を登らずに廻りこんでテントに入る。明日もいい天気だと、おいしい夕飯を食べながらダイヤモンドフェースを明日のルートと決めて長い長い一日が終つた。

素晴しい雲海の上で今日が始まつた。人が降りないうちに沢左俣を降り取付く。チムニーを二P登る、下ではガラガラと落石がすごく上から見ているとおもしろいものだ。今度は左にバンドを登つて行つて、ドーム中央稜を登る良いルートだつた。午後はおもしろくなかった、クラック尾根を登り、最後の日は四尾根ツルム正面をいやなトラバースをしてしまつた。最後にガスの中をドーム西壁を登り、全部で七本も登ることができた。落石が多くなかつたら、小さい岩壁でも変化のあるルートが多くあり良い所だ。今回で夢の岩壁が一つ消えてしまった。又違う夢の岩壁をさがすことにする。

(バーテイ 松原文夫・佐藤正章・富所正利)

前穂高北尾根四峰

松高ルート

一九七七年七月 水島幸男

した垂壁を阿部はフリーでさつと越す。私もアブミの必要は感ぜず、まだまだ私の腕も落ちていないとニンマリ。所がそれが大間違いと分つたのは翌日で、甲南ルートの核心部の垂壁で富所がすんなり登つてしまつた所が越えられず、ハーケンにぶるさがりながらザックからアブミを取り出す醜態をさらし、ガックリする事になる。松高ルートもどうやら終りに近く、次のピッチは私にやらせろとトップに立つ。何と云う事も無い所を二〇m位登ると登攀終了点であつた。すぐ登つて来た阿部に感謝の念をこめて握手する。見上げる右岩稜を金沢達が登つてゐるのが見え、下のインゼル上部を江平達がトラバースしているのが見える。ひとしきり愉快な応酬があつた。さんざん休んで北尾根に向ひ五、六のコルから奥又側に下る。本谷の雪溪をトラバース中、大きな落石があつた。雪溪上の落石は音も無く、又足場も悪い為に注意が必要である。一時頃、にわか雨があつた。

「六・〇〇奥又の池 八・〇〇松高取付 十一・〇〇登攀終了 十五・〇〇奥又の池」

するとカンテ上に数人いる。明大ルートを登攀中の人達である。次のピッチを右に登ると垂壁の下に出た。先行パーティの後を追い阿部トップで登り出す。左斜上で又時間待ちとなる。先行パーティがアブミを使つて越

(バーテイ 水島幸男・阿部 博)

前穂高東壁右岩稜

Dフェース

阿部ちゃんはかなり下の方で姿は見えない。池には藤原達が元気な様子でいた。しばらくしてから水島さん達が到着した。

七月二五日

金沢 清

期日 七月二五日
パーティ 金沢・藤原・富所
七月二十四日

夏合宿の一環として前穂高東壁及び四峰正面壁を登攀することになった。メンバーは水島・阿部、それに若手のホールド藤原と富所である。藤原は茨城の江平と中島とで滝谷を登つてから奥又へ来る予定で先発している。我々四人は上高地からの入山である。夕方まで奥又に着けばよいのでのんびりと歩くことにした。明神でいつものよう朝食を取り徳沢へ着く。ここから新村橋を渡り、真夏の太陽に照りつけられながら松高ルンゼまでの河原歩きですっかりバテてしまつた。ここからルンゼ右側の中畑新道を登る。そこぶる急な道で、岩から林の中を木の根につかりながら行く。上部に行くにつれてジグザグ道になり、やがて左にまわりこむようにして木のはえている尾根に登るとやつと奥又の池が見えた。水島さんはすでに日は暮れていた。

登りオーバーハング帯のトラバースに出る。ここも人工とフリーのミックスで越し一、二峰間のリンネに入つて登攀を終了した。

前穂の頂上からA沢を下降しようと思つたが、ガスつていてるのでわかりやすい三、四のコルから下降することに決め、また引き返すことにしたが、やはりガスの為にコルがわからずだいぶ時間が過ぎてしまつた。やつとの事でコルに着き雪渓を慎重に下り、池にたどり着いた時はすでに日は暮れていた。

剣岳合宿

一九七七年八月

藤原雅一

合宿といつても大浦さんと僕の二人だけである。九日の夜上野をたち立山、黒部アルペンルートで室堂まで入る。室堂から雷鳥沢までは下りのゆるい整備された道が続く。雷鳥沢から先は観光客と別れ山屋だけの世界となる。別山乗越までは急坂の連続でやつと到着、一休みし

た後剣岳へと向う。なにしろ荷物が重いので足がなかなかはかどらない。しかし別山乗越をすぎてからはつねに剣岳が見えてるので精神的には楽である。剣山荘までの巻き道もすぎ、一服剣を越えると前剣までのきつい登りとなる。前剣から剣岳までは岩稜であり、もしハシゴ、鎖などがなければ北鎌尾根よりむずかしいだろう。三ノ窓まで入る予定だったがだいぶくたびれてるので平臘のコルの非難小屋ということで妥協する。

十一日は僕の誕生日である。誕生日に剣岳の絶頂で日本出を見ようと思つたが、あまかつた。昨日の天気とはうつて変わり一面ガスがかかっている。いちおう三ノ窓まで行くことにする。山頂に着く頃には、ふだんの行いの良いせいか晴れてしまつた。山頂では晴れしており、北は剣岳北方稜線、西は白山、南は立山から槍穂連峰、東は後立山連峰までなにもさえぎるものがない三百六十度の展望である。一休みして、三ノ窓に向うが途中で雨が降つてくる。やつとのことで三ノ窓までつくとまた晴れてきた。チンネと言えば左稜線と言われるぐらい有名な左稜線を登ることにする。取付の一P目はまだ雪渓の中に埋つていた。下部ピナクルまでの岩場と上部岩稜がおもしろいが、中間部のハイマツ混りの岩場がおもしろく

ある。Dフェースは僕がオールトップで行くことにして、一ピッチ目を登る。右上するバンド状のクラックで一ピッチ目も同じ様な所で三ピッチ目でスラブ帶の始まる点へ出る。スラブに走るクラックに沿つてテラスまで登る。次の核心部のピッチは垂直であるが、大きなホールドがあり登攀は快適そのものであつた。終了点から北壁を下る。Dフェースは僕がオールトップで行くことにする。一ピッチ目は右上するバンドを登り、続く一ピッチ目でスラブ帶に入り快適な人工で

ない。

十二日は朝から一面ガスつており、少し待つたが良くなりそうもないのにいちおう出かけてみる。ガスの中を迷いながらやつとベルニナルートの取付を見つける。本日はチネをめぐる諸ルートのなかでも最も難かしいと言われている中央チムニー左フェースベルニナルート、hクラックダイレクトルートの継続登攀である。しかしルート図のベルニナルートにしてはどうもおかしく、一Pで魚津高ルートに合流してしまった。取付は間違つていないのにおかしい。一P目のクラックの途中から右上するのだろうか、三Pで中央バンドにてhクラックダイレクトルートに行くがこれもおかしくべらぼうに悪い。岩がぬれているせいもあるがこれはIV級十のピッチではない。それに一メートルぐらいのハングまである。ルート図によればハングは左から巻いているのに、今年登つたビックグレーードの中で一番むずかしく感じた。hクラックは直上しようと思ったが、どこを登っているのかわからなく右壁を登つてしまつた。上部のカンテは岩も堅く快適だつた。左稜線を一P登つて終了。池ノ谷ガリーカを下り三ノ窓の幕場に帰る。天幕につくとすぐ雨が強く降りだす。夜はラジオでゴルゴ13を聞きながら酒を飲みあつた。

剣岳八ツ峰 マイナーピーク東面スラブ

楽しく過す。

十三日は池ノ谷に入ろうと思つたが、池ノ谷側はガスがかかつてゐるので、チネ左下カントー左方カントーを登ることにする。取付に着くと先行パーティが三パーティもいる。前の豊田山岳会の人と話をしながら快適に左下カントーを登つてゐるうちに、左方カントーの取付に着くと先行パーティが三パーティを三P登つてチネの頂上に着く。そこで大浦さんがDフェースへ行こうと急に言いだすので富山大ルートの取付へ向う。四時取付出発。先行パーティを強引に追い越し、一時間十分でこのルートを完登する。本日も夜はゴルゴ13を聞きながら酒をたんまり飲んで寝る。

十四日は待望の池ノ谷剣尾根を登る。朝から天気はバッチリである。剣尾根R七から登る予定だつたが間違えてR六を登つてしまつた。剣尾根R六のコルから池ノ谷左俣ヘバンドをトラバースしクラックを左上ぎみに登る。それからスラブ、ルンゼと登るとドームの頭に着いた。コルBからドーム稜へ行こうと僕が主張したが大浦さんが手をケガしているので、そのまま剣尾根上部を登り長

次郎の頭に着く。そこから三ノ窓まで縦走する。本日は酒も底をついており、おまけにゴルゴ13も終つてしまつていていたので二人とも気分が悪い。

十五日は帰京の日である。池ノ谷左俣の雪渓をアイゼンをきかせながら下り、急な一登りで小窓のコルに着く。白荻川までの下りは長く、河原についても徒渉を三回ほどくりかえして林道に着く。そこから馬場島まですぐであつた。

平君がトップで三〇mの垂壁をフリーで登る。ここで先行パーティを追い越し、堅い鋼鉄のようなスラブをフリクションを利かせ、ノーザイルにて約二〇〇mでバンドに着く。走るようにして登つた為に息切れがする。バンドから上部は傾斜も強く、いやらしそうなので、ザイルを着け私がトップで四〇m登る。トラバースの所で苦労する。ここで再びスピードアップのためとザイルを解く。しかし登つて見るとかなり悪く、ザイルなしで登つたことを後悔する。思いきつてそのまま登る。最後に急なハイマツ帯を登つてマイナーピークに出る。取付からピークまで約一時間半。途中残置ピトンは三本くらい確認できました。

下降ルートは、一、二峰間を下る予定でしたが、昨日の中谷ルートでのハイマツ帯で散々な目に合つていたので、二ノ沢を下降する事に決める。しかしこの下降ルートは踏み跡もほとんどなく、かなりのルートファインディングが要求される下降ルートである。途中二〇mの懸垂下降が五、六回ありました。

なお、このルートからハツ峰縦走をするならば、かなり充実した山行が出来るのではないでしょうか。やたら左岸の急な草付帯を巻く。これがかなりいやらしく手こ

一九七七年八月十六日 中島 淳

人の多い剣の夏に、静かななんびりした登攀をあじわえたルートでした。

(パーティ 江平尚志・中島淳)

甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁

A フランケ

一九七七年八月 名雪博二

昭和五十二年の夏、どういうきっかけからか、赤石沢奥壁を登つてみたくなった。メンバーは、金沢清と私の二人であったが、出発まぎわになつて、木村と吉井が同じルートへ行くことになつた。

木村の進めで、赤石沢の沢をつめて取付まで行くことになつた。韮崎の駅からタクシーにて道の分岐になつた所で、まだ夜の真暗やみの中へ放り出された感で車を降りた。細く続く車道をかなりの間歩くと、夜が明けて来た。朝から天候は思わしくなく小雨もようの中を沢をつめて行く。何十回もの徒渉と高巻きにこの日一日を費し赤石沢の出合にて夕方を迎えた。雨が激しさを増す中で行動を起した。

次の日の朝は真白な乳白色のガスにすっぽりと包まれ手をのばせば届くほどの近さに悪絶無双のAフランケがある事も信じられないほど濃い白に包まれていた。日が昇ると激しい雨が続く。この日一日は、木村・吉井ハイテイのとぼしい粗末な食糧を見るに見かねた我々は、自ら持てる食糧を明日をもかり見ず勇敢にも分け与えてあげるのだった。このかけには食糧などなくとも岩をしたたる一滴の水、野に生える草をはじつても、この悪相の壁を登つて一日や二日は行動できる人だと言う自信に裏付けられ、しかも他人のためにも吾身をかえりみない勇しさがそうさせているのだった。この日一日を無終つてしまつた我々は、次の日、小雨降る中を勇敢にも行動を起した。

せつかく取付まで来たからには、もう一步もあとへ引けない男の意地と鉄の意志が行動する男へとかり立てる。吉井パーティはこの壁に威圧され、三ピッチ目あたりからはもうケンカ腰である。大きな声でどなり合うのだけた。我々は豊かな経験と山男の友情が結ぶザイルに血

ふびんに思えてならない。

翌朝、沢は急登になり高巻をくり返すうち、また雨もようになり沢筋に下降する場所を捲し、ひと休みする間に水量は増え淘つた水が激しい流れとなつた。意を決して大滝の高巻道を捲すが、木村・吉井パーティは左を主張する。我々は賢明にも右を主張、やつと右側に大高巻道を発見し滝の落口にたどり着き、激しい雨をさけて休息をし、怒濤のごとき流れと間だんなく降り続く豪雨を見やりながら心だけがすみきつた夏空のようにタバコを味わう一時を持つた。やがてAフランケ下の岩小舎を発見し逃げ込むようにして落ち着く。雨はいつこうに止む気配を示さず、明日に望みをたくし、すこやかな眠りについた。

を通わせてまさに垂直の散歩を楽しみ、写真を撮り、ラジオで高校野球を聞く余裕を生む。確實な登攀の足どりは軽く垂直を越えた、限界の登攀にもほほえみが浮び、ザイルはいつ終るとも知れぬ絶壁を越え天に向つてまつすぐにのびのびと引かれる。

そして終了点でショボクレている木村・吉井パーティを尻目に男と男の友情の赤ザイルが巻かれ、固い握手に明日の大登攀を約束し合う。甲斐駒ヶ岳の肩に夕闇がせまつてくる。八合目のヘリポートの下にオロク置場のような岩小舎があつたが、何物をも恐れない我々は勇敢にそこでピバークをする。山男の友情で食糧のなくなつた我々は何ひとつほしがりもせず、夜は楽しい音楽と衣服のタバコで豊かな心になり、翌朝も山の朝の湿つた空気で腹いっぱいにし、五時間近く下降路を苦にもせず、口唇に歌を、心に平和を、そして微笑みさえ浮べて下山の途に立つたのである。

駒ヶ岳神社へ下る間、雨が次第におさまり下界はまだ夏であることを徐々に知らされた。しかし吉井は心身ともに疲労し、着ていてるぶ厚いゴム引のカッパを脱ぐことが出来なかつた。我々は歩きながらカッパを脱ぎさわやかに甲斐駒ヶ岳を下りた。

今回は終始雨の中の行動を余儀なくされ、赤石沢の遡行をも含め、いつ行動するか、いつ休むか、そしてルートをどう取るか、という山登りファンの基本的、かつ朴素な疑問に真向からお答えし、まさに山の友情、男とは

決断、勇気等、世の中の真髓に迫つた、当会においても朴な疑問に真向からお答えし、まさに山の友情、男とは

先例のない本年度屈指の後世に残る山行であつたことはこの文を読んだ誰しもが思うことでありましょう。

以後詳しい事を知りたい方はACC-IJ・名雪・金沢を訪ねて下さい。

最後に皆さんのが幸多からん山行を祈念し、文章を終らせていただく。

(パーティ 名雪・金沢・吉井・木村)



明星山南壁ACC-IJルート

一九七七年九月三日 本図一統

富所からの差入れの一〇個あまりのなしが入ったザックが重いが、富所の気持が嬉しい。道路工事のマイクロバスに手を上げたら心よく乗せてくれ、おかげでベースに早く着くことができた。すぐにビバーク用具をデボし取付に行く。小滝川南壁下の岩小屋の後より取り付く。八時四〇分。岩小屋から眺めるところのルートは本当にダイレクトに登っている。一ピッチ目、初登の時はダイレクトに登っているがコンテニュアンスで右から廻り込む。二ピッチ目、脆いフェイスから小ハングを人工で越しスラブを登る。このルートを登るのは七年ぶりでハーケンボルト一本一本がなつかしい(二五m)。三ピッチ目、フリーと人工でスラブを登りハの字四角に入る。ハの字四角の出口はかぶり氣味であるが金は、すんなりこれを乗り越すと人工テラスに着く(四〇m)。四ピッチ目、スラブから顯著なカンテを直上する、このカンテはやすりカンテと命名したとおり、ザラザラのカンテであり、

初登の時中間部できびしいトラバースがあつたのに今はハーケンが打たれており楽になつてしまつた(二五m)。五ピッチ目、そのままカンテを直上するのが初登ルートだ。しかし今は右のジェードルにもハーケンが打たれておりジェードルもルートになつているらしい。我々は直上することにする。金は難なくこのピッチを登つてしまつ(二〇m)。六ピッチ目、下部城塞の左端にある赤茶けた垂壁を登り緩傾斜帯を直上する(三五m)。七ピッチ目、ダイレクトを登つていたパーティがルートを間違えACC-IJルートに入つてしまつ。先行していくので少々待たされる。最近市販されている日本の岩場といふルート図集では間違つたルートが記載されているため間違えるパーティが多いようだ。白いスラブの左側を右斜上すると上部城塞下のバンドに出る(二〇m)。

八ピッチ目、金沢が苦労して打つたボルトが頭上に見える。ルートはダイレクトに直上しているが中央バンド側から廻り込む(二五m)。九ピッチ目、ハーケンが二本打つてある所より五m程左斜上し後は直上する。ザイルが全部伸びても金はビレー地点まで届かず私も五m程登る(四五m)。一〇ピッチ目、三角形の黒い壁を人工で登ると開拓時の私の最高到達点のボルトを確認する、な

つかしい思いでそれを通過し、フリーで洞穴下まで登る(三〇m)。一一ピッチ目、いよいよ洞穴ハシングの乗越だ。悪いフリーの後、人工で洞穴ハシングの上に金の姿が消える。このあたりより雨が強くなるがハシングの下でビレーしている私は全々濡れない。金は全身びしょぬれだろう(二五m)。一二ピッチ目、左の四角を登り傾斜の落ちたフェイスを四〇m。一三ピッチ目、四〇m。登攀終了一四時三〇分。やつとACC-IJルートを登つた喜びは大きい。雨が強く降つてゐる為二人とも全身びしょ濡れ、早く下ろう。西面をシリップしながら小滝駅まで避難する。

(パーティ 本図一統・金 雅男)

谷川岳幽ノ沢 中央壁左フェース

一九七七年九月十一日 神田和臣

左フェース取付(八・二〇)一終了(一四・三〇)一
中芝新道一ノ倉出合(一七・一〇)

ガスつて、いる中を幽ノ沢に入る。いつものいやなへッ

リをして大滝を越え、カールボーデンを登る。ガスで上

部岩壁は何んにも見えない上に調子が悪く何回も吐いて

しまい、今日は取付迄で引返してしまおうと思う。右フ

エースバーイと別れて取付点に向う。岩は濡れており

いやらしい。皆んな登攀準備をしているので、何んとは

なしに自分も仕度をする。ここで引返すのも残念なので

意を決して登ることにする。T₁迄は三ピッチ濡れていやら

らしい。T₁から二ピッチでZピッチの下まで登る。この

ルートは十二年前に登つたが三・四年前に登つたような

気がする。Zピッチは藤原がトップで快適にザイルをの

ばし、左斜上のクラックも濡れていたが、見事なバランス

で登り、T₃に着く。T₃から二ピッチ快適にザイルをの

ばし中央バンドに着き、名雪・鯉川・鈴木・神田)

(ハーティ名雪・藤原・鯉川・神田)

攀終了点に着く。今日の登攀は濡れていたので時間がか

かりすぎたが、充分楽しめ満足すべきものであつた。

(ハーティ名雪・藤原・鯉川・神田)

この日私は、幽ノ沢の右ルートを登る予定だつたが、

先の列車で行つている富所・本図氏を追つて一一時二〇

分の急行に乗つたが自分の不注意で乗り越しをして長岡

まで行つてしまつたのである。先の両氏には誠に申し訳

けないことをしたと思っている。長岡発上野行の一一番列

車に乗り土合駅へ着いたのが九時。一ノ倉出合一〇時。

この日は最高の登攀日和でこのまま出合で寝てるのもも

つたいないような気がしたので本図氏の車に二ルンゼ

Bルンゼへ行く旨を走り書きしワイパーにはさみ込んで

いくへここで、いろいろ無届山行でもあるといふことが

頭にあり考えたが、気力の方が先に走つたのである、責

任問題だ()。

一〇時一〇分出合発。本谷バンドを経てルンゼ合流点

へ。二ルンゼ取付一一時。カラビナとシューリングをだし

中央壁側から取付。最初のピッチは手ごたえがある。ル

ンゼの小滝を快適に乘越えていく。単独だと非常に速い。

谷川岳一ノ倉沢二ルンゼ

B ルンゼ 登攀

金 雅 男

谷川岳幕岩Cフェイス正面壁

一九七七年九月十八日 本図一統

石門下の滝を登つてザッテルに着く。今まで暗い所を登つてきて、精神的にもスッキリしなかつたが、ルンゼをでたら明るくなり、そして視野もひらけ心まで晴れ晴れしてきた。広河原へおりて一服、実にうまいへ一一時五〇分)。一二時、広河原出発、Aルンゼを上部にみながら調子良いテンポで登つていく。Aルンゼと別れて左側にマッターホン状岩壁を眺めながら広い斜面に豊富につくられたバケツを登つていく。最後にブッシュがでて、やぶをかきわけていったら、ヒヨイッと縦走路にでた。国境稜線だ、ハイカーがピックリした目でみてる。時計をみたら二時だつた。西黒尾根を下山、登山センター着(三時一〇分)、幽ノ沢バーイを待つがなかなか来ない。帰つたのかもしれない、そう思いながら告示板に書き置きをし、東京に帰る。

単独を初めてやつたわけだが、二人で登るのとは又違つた充実感があり、それが私にはすばらしいものに感じられた。最後に、今回私がやつた単独そして無届山行、これらの責任問題は問われなければならない。私自身深く反省しているし、とても討論し合い、そして考えていかなければならぬ段階にきてると思う。

「幕岩Cフェイス正面壁」それは私の永年の夢であつた。幕岩のAフェイスを登るべく入山したのは九年前の七月であつた。しかしオジカ沢の雪渓の状態が悪く、我々はCルンゼに押し上げられてしまつた。その時はCフェイスクラックルートを登り幕岩尾根に達した。その時以来Cルンゼに圧倒的に切れ落ちたCフェイス正面壁は私の脳裏に焼き付いていた。

今私と金は二俣に居る。今日は南面にしてはたいへん賑やかである。夜空には星がこんなに多いのかと改めて驚く。今日の登攀は暑くなりそうだ。五時二〇分二俣発。Cルンゼ入口までちょっと迷うがあとはぐんぐん登る。Cルンゼはアプローチとしては少々悪い。二俣にあんなに多くの人がいたのに、ここは二人だけの世界だ。八時一〇分本図トップで取り付く。右手のルンゼを少し登りもうい垂直を左斜上する。誰もいない事を良いことに浮石を投げ落とす。ハング下のハーケンが四・五本打つて

あるスタンスでビレー、二五m。二ピッチ目は金トップでハングを越すがハング上にピンがないという。ルート図を見るところのピッチは全部人工のはずなのだが、金はフリーを交えて一五m直上する。三ピッチ目は細かいフェイスを少し左斜上後、直上し小ハングを越すとバンド状テラスに登る。右上にはピバークするのに良さそうなテラスがある。四ピッチ目人工で二〇m。五ピッチ目、ルート図ではバンドを左ヘトラバースとなつていて、これはバンドとはいえない。フェイスといつた方が良いくらいだ。凹角下に出る手前がハングしており悪い、一〇m。六ピッチ目、このルートの核心部である。全部人工で三〇mで終了、高度感はすばらしい。七ピッチ目五m上のハングに頭を押さえられたテラスに出る。頭上のハングを越さずに右手の垂壁を登るがもろく悪い。灌木帯に入り左斜上すると傾斜の落ちたスラブに出る、三〇m。八ピッチ目、草付フェイスを三〇mで登攀終了、一三時一〇分。固い握手の後、登攀用具を整理しながらいろいろな話をする。金とは今年何回握手をしただろうか。しかし、何回登つても話はつきの所を知らない。山の仲間とは本当に良いものだ。Bフェイスを眺めながら幕谷の頭に向う。途中から暮岩尾根に左トラバースする

が踏み跡がわからず適当なところを下降する。この尾根は歩いて降りるというよりも飛び降りるといつた方が良い位急である。タカノスA沢への下降地点がわからず少し迷うが、あとはゆつくり二俣まで歩く。二俣から暮岩方面を眺めると、もう雲がかかり天気は下り坂らしい。谷川温泉に着くと、今日衝立岩を登つた木村君と江平君が待つててくれた。谷川温泉着一七時二〇分。

(パートイ 本図一統・金雅男)

谷川岳幽ノ沢左方カンテ

吉井清二

一九七七年九月二十三日、私は藤原君・富所君・杉山君、以上四名で谷川岳・幽ノ沢左方カンテに行く事にした。私が左方カンテに行こうと思ったのは、去年村田君・鈴木征男さんと三名で左方ルンゼに行つた時でした。その時、私の心の片すみにいつか隣のカンテを登つてみたいた思つていたルートの一つでした。幽ノ沢を訪れるた

びに、いわば目ざわりな存在として私の目に映つていたのであつた。ルートを調べれば調べるほど、あまり登られていない事に気が付き、我々四名の思いはその壁へと集められ、私は数年の意欲が新しく燃えあがつた。私は三度目のチャレンジであり、今度は登つてやると心に秘め、カンテの右側フェースよりアタックすれば、あのくらいいのスラブなら不可能ではないと、むしろ登攀技術を試みるには丁度いい機会かもしれないという心ぐみで、気のあつた岩友達と議がなるや、左方カンテへと準備を進め上野駅へと足どりが軽い。

土台の駅より幽ノ沢まではいつもとおりである。朝早く朝日を背にした四名の顔はまるで初秋の幽ノ沢の中央壁のように朝日に映えて赤かつた。幽ノ沢の出合は潤葉樹にかこまれており、この奥に広大なスラブがあるとは思えないほど小さい。沢の流れに沿つて進むと、沢床はナメ滝が連続で快適である。そして左また右と曲り右岸、すなわち滝の流水にそつて登ると適当にホールド・スタンスがある。見た目より容易に落口に立てる(大滝約二〇m)。大滝の上、すなわち二俣で広い河原状である。中央壁が目の前で現われる。中央壁でつづけ登ると直角に曲ると二俣下の大滝に登る。左岸は草付で悪い。

明しよう。中央壁は、大きく三つのフェイスに区別される。左と正面と右各フェイスには、それぞれのルートがあり、現在では私の知る限りでは八つぐらいのルートがあり各ルートはフリークライミングを中心としておりルートファインディングがむずかしい。私達四名は左フェイスの取り付までへとカールボーデンを登る。取り付でスラブが乾いていたのでザイルなしでT₁まで登つた。注意するが技術のない人と行く時、または雨の直後などでねれている時は、非常に悪いので、私たちの真似はさけるべきだ。T₁は広く安定した場所である。ここから更に左へとトラバースして左方ルンゼと左ルートの間にカンテが落ちている、そこから本格的なカンテの登攀となる。まず最初に藤原・杉山両名がアタックしハーケン、ボルトの連打でカンテの一ピッチを登る。岩は堅く藤原君はジャンピングのキリを折りやむなく下降して杉山君と替わる。杉山君は、さらにボルト・ハーケン連打してやつと残置ハーケンを発見してカンテを左からルンゼの方へと廻りこむ。このピッチは五級でフリーと人工でホールド・スタンスは外傾しており悪い。杉山・藤原両名でルート工作。富所君と私は、初秋の幽ノ沢を楽しく過ごした。そのあとの荷上げはきつかつた。ユーマルは使用で

きず、四人分の荷物を富所と二人で上げる、四〇m。藤

原君杉山君は悪い悪いの連続である。更に藤原君がトップをやると言うので草付のフェースを直上して右に一、

二mトラバース、そしてまた左上ぎみに登つて大きなテラスへでる。三〇m悪い。このテラスで四名集合して今度は富所君と私がルート工作へまわる。まず俺が、俺が行くと言うので、私は全々トップをできないかと、いや

な思いが心の片すみにあつた。俺もやりたい？（トップ）を」と思った。富所君が残置ハーケンにアブミをセットして登ると、ハーケンが抜けて私の目の前に落ちてきた。

富所君、例のとおり「すいません」の連続である。富所君はトップを私に譲らず再度アタック、ハーケン連打で三m直上して右へ廻り込み、快適に登り、さらに直上すると頭をオーバーハンクで抑えられ富所君は、その先のルートが分からず？ その時幸いにザイル四〇mであった。四級A。今度は私の出番とばかり、そのオーバーハンクを左から廻りフリーで登る。ブッシュを腕力で登るとは快適な三級のフリーである、四〇m。左ルートと交わり、そこから先は左ルートと同じで三級フリー二〇m、そしてスカイラインリッジを登つて、中央壁の頭へと導かれ登攀は終わる、一六時。私と富所は朝帰り

で上野に着く。

谷川岳一ノ倉沢南稜ルート

一九七七年九月二十五日 大坪マリ

仲間より一足先に一ノ倉沢出合に着いた私は、ツエルトで一夜を過ごす事に成った。ひとりの夜は、無数に散らばつている者がドッと波の様に寄せて来る。「この星達の様子なら、今回こそは絶対登れるだろう。」やはり最終的には、この事に落ち着いてしまうのだが…。

ひと眠りして外を見ると、未だ未だ星達は未練そうに谷川の岩々を見下していた。この微笑ましい光景に、フツと初めてこの地に立つた時の事を思い出してしまつた。高校一年で、蛇や蝶を夢中で追つかけていた頃。自然の中に『創造性』や『冒險性』を己がその一部で有るかの様に、無知得の内に求め、森林の中でまどろみ、光の中に溺れている真最中だつた。諸先輩、教師の誘いのもとに『寄り道』として連れてこられたのだつた。「こ

づかであつた。なかなか展望の良い所で、待ち時間はリーダーから他のルートの説明をしてもらい、次回からの登攀計画などこつそり考えて飽る事はなかつた。

「一ノ倉沢初登攀」の第一歩は、リーダーの「よし、いいぞ！」で快く始まつた。ホールド・スタンスは登る為に並べられ、その一步一歩、一把一把が私のもので、それゆえ大切に足を運び、手を伸ばした。とは言えイモムシのおしりである私は、逃げる頭を必死に追いかけ第一関門のチムニーも過ぎてから気が着くと言つた調子で一ノ倉を登つてゐるのではなく、岩場を登つてゐる過ぎなくなつてしまつていた。

夜が明ける。初めて見る一ノ倉のモルゲンロートは、
「地上に与えられた大自然を人間なんぞに破壊されて成るものか。今の自分をおどるなれ。」と抗議している様であり、又「この自然と同化できる事を神慮として誇りになさい。」と言つてゐる様でもあつた。

衝立岩をアタックするバークイより一足も三足も遅れて、金沢氏をリーダーとした我々バークイは出発した。ぬかるんだ巻道を登り、ガレた河原を下りテールリッジまで来ると、衝立岩正面壁で順番待ちしている仲間達に出会い恒例の奇声を発し、罵声を叩き付け合いながらお互への成功を祈つた。そこから南凌テラスまでは極くわ

かれていた。馬ノ背リッジまで来ると、今までのベースに歯止めが

かけられた。又々順番待ちである。私にはとてもラックで、初めて南凌の岩肌に心をよせる事ができた。岩は生きていた。トクトクと温かい心がその中に流れていった。ラムードで登り着くと、リーダーは一昨日前にも着いて、金沢氏をリーダーとした我々バークイは出発した。

「エイッ！」の掛け声で八〇度フェースを乗り越え南凌

ルート登攀は終つた。だが私にとつての難関は、一ノ倉岳までの登り。案の定、溜息まじりにチントラ、ポンタラムードで登り着くと、リーダーは一昨日前にも着いて、金沢氏をリーダーとした我々バークイは出発した。

た様な顔をしてニヤー！

堅炭尾根から石楠花尾根をつたつて下山、途中幽ノ沢V字の上に来ると四ヶ月前の幽ノ沢をしみじみと思い出した。とつくに登攀を終了し休んでいた私の目に入つた

数々の登攀者、それぞれの戦いに涙など流したりして：リーダーに騙されながら一気に下り、恒例のアイスクライムを御馳走してもらう事を半強制的に約束して、出发点の一ノ倉沢出合に戻り着いた。

またくるからね。大好きな山たち。

谷川岳一ノ倉沢滝沢第一スラブ

（下部ダイレクトルート↓
ドーム壁）

一九七七年九月 藤原雅一

名雪さんと車で行くことになり、国分寺の駅で待会わせる。一ノ倉の出合まで入り、そこで仮眠をする。しかし寝過ごし出発七時。第一スラブをやめて二ルンゼからBルンゼに変更しようかと思つたが、九時半までに下部

ダイレクトルートに取付けられ行こうとのことで先を急

ぐ。テールリッジのなめらかなスラブの上から鳥帽子スラブに下降し南稜バルコニーへ登るが、その登りは意外と悪く苦労する。バルコニーから下部ダイレクトルート

を見ると先行パーイテイが三パーイテいたので急いで本谷へ懸垂下降をし、本谷を横切り取り付く。先行のパーイテ

は人工が遅く頭に来る。下部ダイレクトルートはハーケンの間隔も近く岩も堅いので快適である。Y字河原に着き、しばらくは本流沿いに登り第二バンドに立つ。そ

こから第一スラブとマイナースラブを分ける二本のリップのうちマイナースラブ側のなめらかなリップを登る。このリップは幅五・七メートル、長さ百メートルぐらいにわたつて草が一本もなく岩も堅く快適である。そのリップがマイナースラブ上に消えかかるところから左ヘトラバースして第一スラブに入る。第一スラブは下部がブッシュの壁、上部がブッシュ混りのスラブである。そして最後に第一、第二スラブ中間稜にて第一スラブは終り。

Y字河原から第一スラブ 자체しつかりした確保点もなくまたランニングビレーもほとんどのので、技術のそろつた者同志がノーザイルで登つた方が良いと思われる。そこから一時間ほどブッシュを登るとドーム壁の基部に

黒部丸山東壁縁ルート

一九七七年十月一日～二日 木村一

着く。第三スラブを見おろせば先ほどの先行パーイテイが二パーイテイほどいた。彼らはドームを登る頃には暗くなつてゐるだろう。ドーム壁は初めの一P目が悪く、ハーケンの遠い人工登攀である。二P目はフェースを左上しあとブッシュ登りとなりそのままドームの頭に着く。

最後の快適なりッヂを登ると登攀終了である。そこから十五分ほどで国境稜線に着き、重い登攀具をはずす。谷川岳トマの耳の山頂を踏み、一時間で厳剛新道経由で下山、林道にちょうど暗くなり始める頃着く。一ノ倉の出合まで車を取りに行き、水上でなべ焼定食を食べてまた警備隊にもどり、翌日名雪さん、佐藤さんと共に、僕にとつては一ヶ月前に登つたばかりの幽ノ沢中央壁左方ルンゼを登る。帰りは三人で車で帰京する。

（パーイテイ 名雪博二・藤原雅一）

黒部のトンネルを出ると、山々は秋の色も濃く、頂の木々は紅、黄に染まり空の青さとあいまつて一枚の錦絵を見ている様だつた。黒部川の下流に目を転ずると、大タテガミン南東壁に食い込む中央ルンゼの白いスラブ、そして内蔵谷を間に対とうする丸山東壁の黒い壁。黒部を代表する二つの岩壁を目前にして高なる胸の鼓動を感じながら黒部川に第一歩を踏み出していつた。かつて冠松次郎翁が遡つた頃の急流に思いをはせ、一時間程で内蔵谷の出合に着く。そこから約三〇分後には三人共、東壁の下に立つて首の痛くなる程岩壁を見つめていた。

ここから見上げる丸山東壁の全容は意外にも小さく感じられ、今日中に抜けられるのではないかとも思われた。今日はこの東壁は我々のものだ。谷川岳のあの喧そうの中で登つてゐる我々にとつて、久し振りに山と対話できる登攀になるだろう。



ない所だがホールド・スタンスに乏しく出だしからいやな所だ。一〇mフリーで登りボルトに導かれ右斜上して草付きのテラスでビレー、約四〇m。セカンドとラストを確保しながら上部を見るが、ルートが判然とせず正規のルートからそれを事を感じ後続に左斜上してもらいT₁に出る。そこで確保を頼み、振り子気味にT₁の五m位上部にトラバースし、そのまま二P目を直上、約三五m。T₂でトップを中島に替り三P目、三ヶ月ハング目指してボルト連打の垂壁を人工で登り、ハング下でアブミビルー、約三〇m。四P目、三ヶ月ハングの乗越しは、ボルトの間隔が短いので楽である。この頃より太陽が西にまわり壁が日陰になつたので登り易くなつてきた。ハング上も中央バンドでは二Pの人工登攀に終始し精神的には楽である。中央バンド着一五時。少し早いが、ここでビバークと決めて中央バンド右端の洞穴に今日のネグラを作る。ラジオから流れる音楽を聞きながら紅茶を飲み、しばらく時を過す。山で一番楽しい時間だ。

夜中に体がすり落ちるので二、三度目が覚めたが寒さはあまり感じない。五時起床。手早く朝食を胃に流し込み、六時江平トップで登攀開始。中央バンド左端の垂壁をハーケンとボルトに導かれながら約三〇m。大ハング

の合つたパートナーと共に…。

(パートイ 木村 一・中島 淳・江平尚志)

北岳バットレス

ピラミッド／Dガリ－奥壁

一九七七年十月 鈴木莊平

朝五時半、ようやく明るくなりかけた岩場の下、我々鈴木・藤原・鯉河の三人は、ピラミッドフェイスを登るべく、取付地点でそのルートを目で追つていた。寝不足で目は少しひどいが、Dガリ－大滝のすぐ下から、右へ約二〇m程まわり込んだ地點である。朝の出発が早かつたせいか、今日はこのルート一番手のスタートである。これは本当に気持ちいい。

まず、やる気充分の藤原君がトップ引きた。フェイスを一五m程まつすぐ、そしてトラバース。左手の灌木のある地点で一ピッチ。岩は冷たく、氷をつかむようだ。次は、左へまわり込んでいく。草付のバンドだ。この頃

になるとようやく体も温まってきた。

三ピッチ目、スラブを右に登る。ハング下はぬれていれる所もあつて、やつとテラスに着く。III・A₁はIV感じた。意外と油断できぬ。アブミは使用せず、A₀で登る。

次はちょっともろいフェイスと凹角をハング下のテラスまで行く。そして草付のバンドをまわり込んで一〇m程トラバースした。今度のピッチはルート中の核心部だ。いままでより少し黒い岩肌となる。見上げると上部はジエードルとその上に五〇m程のハングを持っている。どうやら上部の二〇mがやつかいそうだ。二〇m程登つてみると予想通りだ。小さなホールドとスタンスをひろいながら強引に登る。ナック一個をランニングペリエに使用。なぜかと言えば、途中にある二本のハーケンが指で簡単にぬけてしまつたからだ。小ハングを左から強引に登つて四〇mいつぱいでテラス着。

後続のパートイも同じ会の仲間らしく、ガヤガヤと観客席のうるさい事。とはいえ、なんやかやと楽しいのでも悪く感じる所も今日は気にならない。三人テラスに集まつてこの先を相談する。上部までの完登に未練があるが四尾根のすごい混雑でそれをあきらめ、Dガリ－奥壁から稜線にぬけることに決めた。

の下でアブミビレー。いよいよ大ハングの乗越しだが左斜上気味に越しているので張り出しの割には、案外楽に抜けられそうだ。トップをビレーしながら右手のダイレクトルートを目で追うと、上部の二段大ハングが圧倒的な大きさで張り出している。いつの日か、あの大ハングを乗越してみたいものだ。トップはもうハングを廻り込みさらに上部を登つている様子だ。三〇mでテラス着。この大ハングは高度感が素晴らしい、足元から一気に内蔵助谷まで切れ落ちていてゾクゾクする様な高度感だ。さらには約四〇m登り大テラス着九時三〇分、事実上の登攀は終了するので、登攀用具をザックに詰め、重くなつたザックを背負い丸山の頭まで急なブッシュ登りを繰り返し、いい加減嫌になつた頃、丸山の頭に立つた。

紅葉した木々の間から立山連峰が望まれ、気持の良い所だがキジの臭いが鼻をつき、早々に立去る。北面の急なブッシュ帯をブッシュにつかまりながら内蔵助谷に下降するが、途中何度も踏跡を見失いながら一三時、ハシゴ谷乗越への登山道に出る。帰路ダム見物をし、観光客と共に黒部を去る。再度黒部を訪れる機会が出来たら、丸山のダイレクトルートか、大タテガビン南東壁・奥鐘西壁を登つてみたい。やはり山々が一番美しい秋に、気

四m程登り、そのバンドを左へ下り気味に二〇mト

ラバース、残置ピトンのある所から四〇mの懸垂でDガリーにおりる。会の集合時間が気になるが、このまま登ることに決める。空は快晴、紅葉は今が見ごろ、明るく開けた岩、全てがそろつていて、何も言う事がないのだ。

そこから、階段上の岩を約八〇m~一〇〇m、コンテニアインスで登つてから、アンザイレン。右手はあらゆるルートに人が鉛なりの状態だ。まるで、ケーキにたかるアリのように。一ピッチ、ハング下のテラスめざしてガリーレ登る。Dガリーモ先行ペーティがいるが、時間が気になる我々は、かまわず抜いて行く。

次は、ハングを右から(本来は左から)まわりこみピッチを区切る。次はクラック、快適だ。クレッターシューズなら今日はもつと楽しいだろうと思つた。次のピッチも、先行ペーティに先をゆずつてもらつた。左へ斜上して、灌木のテラスへ着く。アブミを二カ所使う。城塞ハングは、リクエストにお答えして、チムニーを登るべく、右へ二〇mトラバース。八mのチムニーを登つて、四尾根の登攀終了点へでた。

時間は12時頃であつた。集合時間の1時に間に合わせるべく、トコトコとペースへ急いだ。

第一尾根ノーマルルート

一九七七年十月 富所正利

十月の連休、バットレスは人があふれていた。よくこんなに人間が集まるものだ。自分もその中の一人であるが…。すいているルートといふことで、一尾根ノーマルへ名雪さんと行くことになつた。登つてみてとても驚いた。岩登りと言えるものではなく、ガラ場登りだ。落石を起すまいと、非常に神経を使う。正面ルートと合流した地点で、二尾根Bガリーテフランクを見ると、吉井・藤原ペーティが登つてゐる。突然、ひとかかえもある岩がくずれ落ちた、二人とも大丈夫のようだ。自分達もここからザイルをつけ登るが、すぐ終了点に出た。そして北岳の絶頂を踏んで大権沢を下つたが、終了点から山頂へ八本歯のコル付近まで、頭が重く、呼吸が乱れ、休んでもなかなかおちつかない。まさかと思つたが、高山病の軽いものらしい。下るにつれ体の調子がよくなつて来たからだ。大権沢の下りは、足元に紅葉を見ながらの楽しいものだつた。

(ペーティ 名雪博二・富所正利)



何年ぶりかで会報「ナーチャル第八号」を発行することになつた。会報を編集していくと思うことは、素晴らしい記録なり山行の内容が充実していることである。

山行ではわからない仲間達の考えていることなどが文章を通してよく理解できる。やはり会報の発行は、年一回は発行していかなければならないことを切望したい。

日頃の我々の実績がこうして形となつて残つてゆく事に限りない歓びを感じる。最後に忙しい中を寄稿下さい。

さつた会員の方方に深く感謝します。(黒岩英雄記)

